



北林未知男(27)

岡本ハジメ(17)

木原綾子(27)

小津達一郎(50代後半〜60代前半)

風子(20)／北林玉江(70)

北林靖子(55)

北林六郎(47)

北林幸男(25)

北林信子(3)

フランソワ(オス)＝小津さんの犬日本犬)

エミール(オス)＝小津さんの犬日本犬)

クリスティーヌ(メス)＝小津さんの犬日本犬)

咲子(心臓病の双子)

散子(心臓病の双子)

女学生

男子学生

暗闇の中より、さながらミュージカル映画のプレリュードの勢いで、「アンダンテ・カンタービレ」聞こゆ。

舞台明るくなると、その音は風に途切れ、小さくなる。

自転車に乗った夏服の女生徒達行き交う。口々に「お早よう」。
空は青空。

遠くの校舎から先ほどの懐かしい音楽が聞こえてくる。

女生徒達の自転車の間から、北林未知男が走って現われる。長袖の白いシャツの袖口を折り、黒い学生ズボンを穿いている。手には黒カバン。

高校生のいでたちの未知男だが、顔は中年にさしかかった男特有の、あるカゲリを
含んでいる。

未知男、立ち止まり空を見上げ、眩しそうにして息を吸い込むと、ゆっくりとある
一点を凝視し出す。

そしてその目は、外から内へと。

未知男

向こう岸は輝く摩天楼。そう、あれは東京。まだ若いバビロニアの都です。そして、この灰色の大きな川のこちら側は、まるであの戦争が起らなかったような、風の動かぬ街なのです。一時期に比べれば波も澄んでいて、あちら側から風が吹き込むと、白いさざ波が、砂のようにソロソロとやってきました。少しずつ、ずれながらこちらに戻ってくるその波は、遠い時間を運んでくるようです。その時間がこちらにたどりつくまでは、ここはとても静かな街です。きつと、向こう岸より、こちらの街は、時間がゆっくりと過ぎるのでしょう。でも、あちらの人は余りこちらには来たがらないよ

うです。ただ新しく出来たあの橋の上を電車がゴトゴトと通過するだけの、風景の街がここなのです。あちらの人がここに来たがらないのは判る氣もします。来てしまつたら最後、もう二度とあちらの時間に戻れぬような、そんな氣のする街だからです。あの「ブリガドーン」のように、一夜を過ごしてしまうと、百年の時を奪われるような……。そんな後悔を孕んだ街なのです。きつと。

こうやって川岸に立つてあちらの白い街並を見ていると、子供の頃に読んだ「オズの魔法使い」の「死の砂漠」を思い出します。現実の街と、オズの国とを分けへだてるあの砂漠、決して歩いては渡れぬというあのまさかの砂漠です。僕はこの砂漠を越えてみたかった。あの若い街を、白い服を着て颯爽と歩いてみたかった。だから、あちらとこちらをつなぐ、この街に一艘しかない小舟を漕ぐ父の仕事を、本気で継ごうと考えていたんです。行つて戻つて、戻つて行つて、そしたら、あちらとこちらの夢の部分だけを見ていられるような、そんな氣がしたのです。行つたきりにはならない青春を、子供のくせに考えていたんです。けれど、あの橋が、あの鈍色に光る鉄橋が僕の夢を思い出しにしました。それもたった一晚のうちです。あの日からもう、三月ばかり経ちますが、あの日目を覚ますと、向こう岸の若きバビロンがますます成長し肥大し、もつと冷たくこちらに背を向けているのが見えたのです。そしてあの橋が、でかいクジラの骨みたいな恰好で突き出して、こちらに侵入してきています。僕は、これは夢なんだと思ひました。夕べは一夜漬けの試験勉強をして、なんだか胃の辺りがつかつかのまま無理に眠つたから、だからこんなできそこないの夢を見たんだと思つたのです。できそこないの近未来、どこか片手落ちの知恵足らずの近未来の夢。だってあちら側はあんな風なのに、この街は依然として昔のままなのですから。

けれど、そこでそのまま待つてみても、夢は終わろうとしないのです。はやく目覚めようと、こんな時のいつものどんな手を使つても、「ああ夢だったんだ」という、あの晴れやかな朝の気分が戻つてこないのです。僕は学校へ行つてみました。今日は数学のテストだというのに、目覚まし時計はもうお昼を回つていたので、とにかく駆け出してみたのです。そのうちきつと覚めるだろう。いくら夢とは知りながらも、今日は学校を休む訳にはいかないんだと、いつも夢の中で思うように思つたのでした。ああ、けれど……。いつかこんな日がくるのじゃないかと、幼い頃から度々夢で見た通りのことが待ち受けていました。教室の戸を開けると、そこには見知らぬ生徒達がお昼の弁当をひろげていたのです。誰ひとりとして見覚えのない顔、顔、顔、僕の心臓は足の裏まで沈んだようでした。そこらじゅうがキーンと鳴つたようでした。冷えてくる手足を抱えながら僕は、ここで目が覚める。そう、いつもならここで目が覚める。僕はそう繰り返しましたが……。けれど今日まで、あれから三月経つた今日の日までも、それは覚めることがありませんでした。あれは夢ではなかったのです。僕が一晚と思つていた間に、時はなんと十年の日々を重ね、僕は十年前の僕のまま取り残されていたらしいのです。三年寝太郎なんて話がありましたけど、僕は十年寝太郎だったんです。

又、女生徒達が通り過ぎる。

でも、僕はほんとは思つてるんです。今度目を覚ましたら、今度こそ元通りになるのだから、これはいつもより、ちよつとばかり長い夢なのだから。

後方より岡本ハジメが走って現われる。

ハジメ
おい、遅刻するぞ。

未知男
やあ、お早よう。

ハジメ
ホラこれ。

と、カバンの中から白い弁当の包みを渡す。

未知男
あれ？

ハジメ
忘れたろ？ さっきあんたの家の前通ったら、あんたの親父さん青い顔して、「おー

い弁当！ おーい弁当！」って叫んでてさ、あんまり気の毒なんで、俺が持ってきてやった。

未知男
申し訳ない。

ハジメ
あんまり食わないんだって？ 親父さん心配してたぞ。十年間も、薬だけで生きながらえてきたから、物をかむという習慣を忘れちゃったんじゃないかって。今にアゴがダメになる。アゴがダメになったら歯も抜けるぞ。歯が抜けると下半身もダメになるっていうからな。

未知男
（客席に）彼は岡本ハジメ君です。あの日、三月前に初めて出会った同じクラスの生徒です。翌日から十年前と同じクラスに通い出した僕に、最初に話しかけてくれたのが彼でした。

ハジメ

大丈夫？

未知男

え？

ハジメ

俺がちゃんと見えるんだろうな。俺が見えずに、見えないものが見えるようじや、別な病気の末期的症状だぞ。

未知男

え？

ハジメ

(動いてみせて) っていう病気だよ。あんた今見えない誰かに話しかけてただろう？

未知男

日記をつけてただけだよ。

ハジメ

あんたいちいち喋って日記つけるの？

未知男

頭に刻みつけてたんだ、忘れないように。

ハジメ

(頭をのぞき込んで) こん中に日記帳がねえ。

未知男

くすぐったいよ、君、自転車は？

ハジメ

今日は午後から雨が降るぜ。みんなバカだよ、朝の天気だまされて、帰りにや、ズ

未知男

ブぬれさ。

未知男

何言ってるんだよ、毎日毎日干わいてて、ひと雨降ってくれりやって、日本中のお百姓

ハジメ

さんが泣いてるのに。

未知男

鼻がヒリヒリするからな、絶対今日は雨が降るさ。

未知男

鼻？ そら鼻のかみすぎだろ？ 君、チクノーショウなんだって？ あれは一生治らんらしいな。

ハジメ

違うよ！ 傷が痛むのさ、ここんとこ中学の時三針縫ったんだぜ、三針。あんたんと

未知男

この犬にかまれてさ。

未知男

ええ？

ハジメ

知らなかったろ？ あんたが人事不省の間のことだもんな。言ったらあんた、泣いちゃうんじゃないかと思つて黙つてた。俺つて友達思いだろ？

未知男

どの犬だよ、ええ？ どれがかんだんだ？

ハジメ

いいよ今さら、……ホラ、泣くなよ、もう昔のことさ。

未知男

知らなかったあ！ ……。

ハジメ

いいって！

未知男

痛くない？

ハジメ

痛くないよ……ただ、雨の降る日はヒリヒリするのさ。

未知男

可哀そうだな、替わるもんなら替わつてやりたいよ。

ハジメ

これは犬のバイキンのせいだと思ふんだ。動物つてのは日々の天候に敏感だつて言うだろ？ 俺、犬のバイキンのせいで、鼻だけ動物なんじゃないかと思ふの。今に地震なんかも予知できるようになると思ふの。そしたら真先に逃げような、学校裏の竹林に。

未知男

（ハジメの鼻をいじくつて）ああ、ここね、ここんとこちよつとかけてらあ……あ、鼻の下んとこまでちよつとヒキツリが、あ、君！ 大人になつてヒゲでもはやかさうつて時に君、ここだけはえないんじゃないの？ どうするの？ きつとその時、うちの犬をうらむだろうねえ。よりによつて、こんなところを、ああ……。ヒゲのアデランス発明されないかなあ。

ハジメ

変な心配するなよ、うちは代々、毛の薄い家系なんだ。ヒゲなんかはやしやしないよ。

未知男

良かった。助かった。

ハジメ

それにあんたにや、五つん時の恩があるし、

未知男

え？

ハジメ

ホラ、川に落ちて、溺れて死にそうだったのを、あんた助けてくれたろう？ あの時
は今と違ってこの川もヒドイ臭いがしたっけな。イオウ分が強すぎて、魚なんか昔
からいなかったけど、じいちゃん達の頃はみんなでこの川で泳いだりしたんだってね。
俺、なんで落ちたのかな、泳ごうと思ったのかな。

未知男

あれ君なの？ おととし僕が人工呼吸で助けてやったあの……。

ハジメ

十二年前さ。良く原っぱで野球して遊んだろ？ お兄ちゃんお兄ちゃんて、俺、あん
たにくっついて。

未知男

君、あの、ハツ君？

ハジメ

へへへ、

未知男、手でハツ君とハジメの大きさの違いを確かめている。

未知男

どうして言ってくれなかったの。

ハジメ

徐々にと思ってたね。なんだか気の毒で……。

未知男

ビックリだなあ。

ハジメ

な？ もし俺があんたなら、いやだもんな、あんなガキと同級生だなんてさ。

未知男

(客席に) 僕には、あのひ弱なハツ君とここに居るハジメ君とが同一人物だなんて、
とても信じられないのです。つい三月前まで鼻たらししてお兄ちゃんお兄ちゃんてくっ
ついてきてた、あのハツ君が、この……。

ハジメ

だから……、あんたとこの犬にかまれたぐらいで、あんたをうらんだりするもんか

未知男

……。いや、これは夢なんだ……。(ハジメの顔を見て)でもなんてリアルな夢なんだ。(と顔などをさわる)

木原綾子が自転車で通りかかる。

綾子

あんた達、遅れちゃうわよ。

ハジメ

あ、先生。

未知男

お早ようございます。

綾子

お早よう未知男君。

ハジメ

先生、俺走って行きますから、未知男さんをそこに乗っけてってくれませんか？

綾子

え？ 未知男君を？

と、もじもじ。

ハジメ

少しずつ体を慣らして行くようにって医者に言われているのに、昔のつもりでいきなり走っちゃったりするんですよこの人は。あんまり食べてないようだし、心配ですよね、ね、先生。

と、未知男を乗つけようとする。

と、自転車が倒れ、ひっくり返った綾子を未知男、抱き起こす。

なんとなく戦後の青春映画の風情が漂う。

未知男

大丈夫ですか？

綾子

え、ええ。

未知男

(客席に) この人は木原綾子先生、僕らの担任です。三月前のあの日、この人は教室に入ってきた僕を見て、「あっ！」と言いました。その「あっ！」の意味は何だったのか。でも、僕もこの人とどこかで会った気がするのです。いえ、誰かに似ているのかも知れません。それは……。

綾子

どうしたの？ 未知男君。

ハジメ

気することないですよ。日記つけてんですから？

綾子

日記？

ハジメ

急に昔だと言われた三月前と今とをつなぐ日記。空白の中に現実をぶち込んでんですきつと。

綾子

思い出してくれたのね？

未知男

え？

綾子

あたしが誰か判るまで黙っていようと思っただけど……判ったんでしょ？

未知男

え？

綾子

あたし綾子、木原綾子よ。

未知男

ええ、知ってますよ、担任の木原先生でしょ。

綾子

違うわよ！ あなたの席の三つ後ろだったア、ヤ、コよ。

未知男

……まさか……あの、無口で……前髪を目がかくれるくらい垂らしてて、たまに先生

綾子

に当てられて、喋る時には、モゾモゾ口の中だけで……何言ってるんだかさっぱり聞こえないあの綾子？

未知男

そう……その綾子。まさか……で、でもめがね掛けてたし、それに一重まぶただったような……。

綾子

そうよ、高校卒業して、大学へ入る時、手術したのよ二重に。だって未知男君、女は一重まぶたじゃないとって言ってたじゃない。一重のキツネ目は嫌いだって、あたし家に帰って泣いたわよくやしくって。だからバイトをしてお金ためて、やっちゃったじゃない整形手術。みんなにも言われちゃったわよ、前の方がかわいかったって、どうしてくれるのよ！

未知男

……。
先生ダメだよ急激に色んなこと言っちゃあ。俺だってさつき重大なこと打ちあげたばかりだし。

綾子

だってだって、この三月、あたしがどんな思いをしてきたか！ すぐに言いたかったわよ、でもこの人全然気が付かないんだもの。あの頃からあたしのことなんかちっとも気にかけてくれてなかったからだわ。それなのにあたしったら、手術までしちゃって、それに、それに。

未知男

目立たなかったからね、綾子って。いるのかいないのか判らなかつたものね。木原先生がああ綾子？ 女ってずいぶん変わるもんなんだなあ。で、でも、僕クラスで綾子と喋ったことあつたかな。

綾子

なかつたわよ一度も。二年間も同じクラスだったのに一度も喋ったことなんてなかつたわ。目の話だって、誰かと話してるのを横で聞いてただけよ。でも未知男君の話し

ハジメ

てることなら、いつだってあたしちゃんと聞いてたわよ。いつもいつも遠くから、未知男君のこと見てたんだから。

先生は、未知男さんのことが、好きだったんですね。(とマジメ腐って分析するよう
に)

綾子

……初恋よ。……三月前、未知男君が戻ってきた時、もう夢かと思ったわ。今度こそ、今度こそ、この思いを打ちあげようと、あたし毎日ドキドキしてた。だって今まで待っていたんだもの。この十年、未知男君が戻ってくるのを毎日毎日待っていたんだもの。知ってる？ あの頃未知男君とつき合っていた橘富士子。あいつ結婚したわよ五年前に。今じゃ子供が三人だってよ三人。富士子と張り合ってた貝塚しのぶだって、あのホラ、校門前の文房具屋の。東京のなんとかいう政治家に囲われちゃって、渋谷で店出したわよおとし。スナック「待ってるわ」だって！ 待ってるわなんちゃって、待てなかったのよみいんな。あたしただけだけだわ、あたしだけお見合いみいんな断っちゃって、あたしずっと「待ってたわ」。

ハジメ

先生、あの、まさか処女……なんですか？

綾子

自慢じゃないけど、キスもしたことないわよ。(と煙草を吸う)

ハジメ

二十七で？

綾子

だって待ってたんだもの……(と泣く)

ハジメ

おい、どうすんの？

未知男

しかし、なんだか、知らないオバサンに言われてるようで……。

綾子

あんただってもうオジさんでしょ！

未知男

僕はどうしてもまだ十七のつもりなもので……十も年上の人とはどうもといった感

ハジメ

行くぞ。

と、走って去る。

未知男

夢なんだきつと……もしこれが現実ならば、それなら僕が眠っていたという十年の間に僕が見た夢はどこに行ってしまったんだ。だって夢なき眠りを十年も続けたのなら、それは死と同じことだもの。十年も死に続けた人間が、生き返ることなどあり得ないのだと僕は思うのです。

と、川の中より声聞こゆ。

声

おーい。

未知男

ややつ！

川からザバっと中年の男が現われる。

未知男

わっ！

男

ダメだ、見つからん。

未知男

……。

男

君も泳げるんだろ？ ボサツとしてちゃ君、男がすたるんじゃないかと私は思うよ。

未知男

は？

男 今、落ちたる？ ね？ 子供が落ちたる？ だいぶ川下の方まで行ってみたけど、ど

うも見つからん。

未知男 落ちましたか？

男 ええ？ さつき、君のいたこの辺りからドボンと落ちたる？ ……あれえ？

未知男 青い、青いネツカチーフなら、さつき、木原先生が、あの、自転車にまたがった時に、

落としたような、

男 木原先生？

未知男 僕のクラスの担任の……

男 今日日、子供が担任なんか受けもって、先生やっちゃうの？

未知男 いえ、落ちたのは青いネツカチーフで、先生が落ちた訳じゃ。

男 ネットカチーフ？ 古いねえ、都心の若者はみんなスカーフって呼ぶしろ物じゃない

の？ そのネツカチーフって、君、東北の農村地区からバスに揺られて、古い名画座

の雨降る画面のモノクロに、青いネツカチーフを見てしまった、文学青年の記憶を愛

した学生かい？

未知男 は？

しかしドボンと落ちたぞ、ドボンと。

ネツカチーフにとめられた翡翠ひすいのブローチがそんな音を出したのかも知れません。

これか？（と出す）

未知男 ああ、それ。（と受け取る）

男 ブローチ一個にいちちようらダメにした。後で言つといて、クリーニング代なんてほ

んとに結構ですから……何のお礼もいりませんから……そう言つてほんとに何

も出さなかったら、私は、今夜、その女の首をしめて、おまけにもすごくHなことなんかもしてしまうかも知れません。

未知男 あ……お、おじさん！

男 ごぶさた。

未知男 おじさん、帰ってらしたんですか？

男 うん？ うん。

未知男 咲ちゃん達に会いました？

男 いやまだ。

未知男 早く行きましょう、風邪ひきますよ。おじさん。

男 君、おじさんじゃないだろう？ 小津さんだろ？

未知男 でもおじさん。

男 オズさん！ 私は小津達一郎だよ。

でも小津さん、小津さんは僕の義理の伯父さんなんですから、おじさんなのに小津さんて呼ぶと、おじさんがなまってオズさんと呼んでいるようで、都会のプライドが傷付くんですよ。

男 ここが都会か？

都心にひつついたぶれた輪郭のような中途の田舎だからこそ、田舎者とは呼ばれたくない。千葉、埼玉の意識の流れが僕にはよおく判る。

男 そんなら小津安二郎が誰かのおじさんじゃなかったらどうする？ ガキの頃からおじさんと呼ばれたら、本当のおじさんになる前に老衰で死んでしまうぞ。
未知男 でも。

男 小津さんは埼玉に住んじやいけないの？ 真の東北にしか棲息できんのか？

未知男 東北じゃ小津さんもおじさんもオズさんなんですよ。

男 それじゃ、小津さんとおじさんとの区別はどこでつけるんだ？

未知男 文字で書きや判りますよ。

男 東北人は手紙で会話する訳？ これからちよつとドライブかなんかどうって、これからに、三日もかかつちやつて、「いいわよ」っていうのに又三日もかかつちやつたら、そのうち恋もさめるだろうに。東北人は恋愛もできないわけ？ 私はとっても疑問だな、それ。君、東北人のテンポがのろいのを、なまりのせいにしちゃいかんよ。東北人を差別していると、ある日、日本列島が爆発して、東西南北が入れ変わってだね、自分こそが東北人になった時に、痛い目に合うよ。

未知男 は？

男 は？

未知男 あの……。

男 いや、自民党が笑っていられるのも、今のうちだけだと言ったんだよ。

未知男 おじさん風邪ひきますよ。

男 オズさん。

未知男 ……小津さん、行こうよ。

男 君、学校は？

未知男 あ、そうか。

男 先に帰ってるよ、子供じゃないんだから、ひとりで行けるから。君はお勉強してらっしゃい。

未知男

今度はどこに行つてたんです？ 南米ですか？ アフリカですか？

ちよいとソ連まで……チェルノブイリ付近の道路工事を少し。区画整理で、古い工場を爆破するつてんで、ちようどダイナマイト扱つて時限装置で発火させて走つた途端に、すげえ音だろ？ 時限装置の故障かと思つてヒヤリとして振り返つたら、まだ工場もそのままあるわけよ。

未知男

原発事故の方だったんですね。

男

そう、遠くの方だったけどね、山のふもとに赤い火青い火ゴーゴーと老若男女がロシア語の悲鳴をあげながら方々へ逃げまどうさまは、さながら、昔町内会の映画鑑賞会で観た栗原小巻主演の日ソ合作映画を観るようでもあり、それでポカンとして見てたら、工場の方もふつとんで。

未知男

よく無事でしたね。

男

三カ月入院したかな。「私は被爆したわけではありません」つてロシア語暗記するのに苦労したっけ……（と二人で目をうるませて遠くを見る）な訳ないだろう！ そんなとこいて無事に帰つてこられる訳ないだろう。

……。

未知男

君はほんと、からかいがいのある少年だ。その性格を親に感謝しなさい。じゃあね。

と、去る。

未知男

小津さん、あの、小津さん。

と、言いかけるが、あきらめて、学校の方角へ走り去る。

「痛い」と、どこかのベッドの中から声がする。また「痛いっ」と声がして、二人の少女がベッドから起きあがる。二人のうち咲子は美少女。散子は二人の老成した内面を現わすかのような醜く太った中年である。二人とも同じように胸に手をあてて咳払いする。二人は額にしわを寄せて何か考え込んでいる。

咲子・散子

……不幸せよね、あたし達……。

二人

あら、あんたもそう思ってた？

間。

二人

や、やだ。

間。

二人

やっぱり双子なのよねえ、あたし達って。

間。

二人

痛い！

と、同時に胸に手をやって。

二人、同時に咳払い。

二人、同時に布団にもぐりこんで、病気のパターンのような咳をゴボゴボやりながら又起きあがる。

散子

いくら顔形がいつしよだからって、こんな病気までいつしよに持ってるなんて、やんなっちゃうわ。と思ってるでしょ、今。

咲子

うん。

散子

病気の双子じゃなくて、健康なひとりの少女だったらどんなに幸せかって思ってるわね。

咲子

うん。

散子

冷たいわよねあんたって。あたしが死んじゃえば良かったって考えてるでしょ。あたしさえいなきゃ、あんたひとりで健康に生きられるって思ってるでしょ。

咲子

そんなこと……。

散子

嘘よ、今あたしそう思ったもの。あんただって思ったわよきつと。咲ちゃん、あんたとでもいじわるね。

咲子

散ちゃん、あたし、散ちゃんがいなきやいいなんて一度も思ったことないわ。だってひとりじゃ寂しいもん。

散子

じゃなんで今、あたし、あんたがいなきやいいなんて考えたのよ。

咲子
散子

そりゃ、散ちゃんがいじわるだからよ。

そうか、あたいしいじわるなんだ。やだな、いじわるな病気持ちの双子なんて誰もお嫁に貰ってくれないわ。

咲子

散ちゃんお嫁に行くつもりなの？

散子

やだ咲ちゃん行かないの？

咲子

あたし達、病気なのよ、それも心臓よ。お嫁に行く前に死んじゃうわよきつと。

散子

死んじゃうの？ あたし達。

咲子

死んじゃうわよ、心臓が悪いんだもの、ハタチになる前に死んじゃうわ。

散子

やだな、恋愛したいのに。

咲子

あたし達、ガマンするの慣れてるじゃない。運動会にも出られなかったし、修学旅行にも行けなかった。学校に行ったのだから先月は十日間だけで、今月に入ってからずうっとベッドの中でしょ。子供の頃はまだ元気だったわよねあたし達。そして、三月前まではそれでもなんとか学校通ってたわよ。それが未知男ちゃんが目を覚ましてからよ、急に悪くなったの。未知男ちゃんの病気が治った途端に、あたし達がガックリきちゃったわよね、どうしてかしら。

散子

あんだ、あたし達が学校行けなくなったの、未知男ちゃんのせいだって言うの？

咲子

……。

散子

ね、咲ちゃん、死んじゃったたらどうなるのかしら。列車に乗って遠いお空の銀河の果てまで昇って行くのかな。

咲子

バカね、死んだら骨になるのよ。骨が列車なんか乗れっこないわ。

散子

骨？

咲子
散子

今朝食べたシヤケの骨、あんたひっかかって苦労したでしょ、アレになるのよ。骨じゃお嫁さんになれないね。

咲子
散子

あんたそんなにお嫁さんになりたいの？
白雪姫だってシンデレラだってみんな最後のページではお嫁さんになるのよ。そうならなきやお話は終らないのよ。だからお嫁さんになる前に死んじゃったら、あたし達のお話は終らないわ。あのシヤケの骨はそう考えなかったかしら。

咲子

骨が考えるもんですか。

散子
咲子

じゃあ、誰が考えるの？

散子

他の生きてる人がよ。あたし達が死んだら、他の生きている誰かが、幼くして死んだ薄幸の双子のお話を書いて本にしてくれるんだわ。

咲子
散子

きっとパパね、パパが書いてくれるのね。
パパは死んじゃったわ。

散子

でも、パパは出かける時に、丈夫な心臓を二つ手に入れて、きっとあたし達に移植してやるんだって言ってたじゃない。

咲子
散子

でもパパの骨はなんにも言わなかったわ。白い箱を振ったらカタカタ鳴っただけ。あんた。パパの骨見たの？

咲子

一緒に見たじゃない、遠い外国から届いた白い箱。叔父さんも叔母さんも泣いてたじゃないの。

散子

ああ、ずうつと昔ね、あの白い箱……嘘よ、あんなのパパじゃないわよ。パパは外国へ行くといつもめずらしい色んなものを送ってきてはあたし達を驚かしたでしょ？ アレもきつとそうよ。あれが骨だしたら、きつとそれはアラスカかどつかの

咲子・散子

恐竜の骨だわ。それともアフリカのオランウータン。今頃。パパは、どこかで、強くて優しい心臓を探して、方々を飛び回ってるんだわ。

……あああ、雨が降らないかなあ……雨の日だったら、じっとしていられるのに。

間。

散子

咲ちゃんあたしね、やっぱりあたし、赤いのが良かったのよ。

咲子

え？

散子

青いのなんてやっぱりやだったわよ。だって女の子なんでもん、そうでしょ？ でもね、あんたきつと赤いのがいいって言うだろうと思って、あたし遠慮して先に「青！」って言ってやったのよ。だって、あんたとあたし考えてることいつも一緒なんだから、だからあたし……「赤」って言えなかった。

あのさ……。

散子

今度はあんたが先に言ってよね。叔母さん、ユリの花の模様の浴衣縫ってくれてるの知ってるでしょ？ 仕事が忙しくて夏の盛りには間に合わなかったけど、次の日曜にはできるって言ってたよね。

咲子

散ちゃん、あのさ。

散子

言ってよね、先に。

咲子

赤、青ってなによそれ。

散子

セーターよセーター。

咲子

え？

散子 叔母さんの手編みの奴。

咲子 ええ？

散子 小学校の頃、叔母さんが編んでくれたここんとこにボタンをついたおそろいのアレ。

咲子 ああ、去年古くなったからってほじめて犬小屋のクッションにしたあのセーター。

散子 そうよ。ここんとこ犬小屋のそうじさぼってたのはね、あの時の悲しい気持ちを思い

出しちゃうのがつらかったからよ。

咲子 なんだ、あの時言ってくれたら良かったのに。あたしは青だって赤だってどっちだって良かったんだから。

散子 ウソよ！ ウソ！ あたしが赤い方が良かったんだから、あんただってそのはずよ。

あんたが赤いセーター着て嬉しそうにこたつでミカンなんか食べてるの見るの、ほん

とつらかった。叔母さんの手前、しょっちゅうあのセーター着てたでしょあたし達。

あの頃は毎日が地獄だった。毎年秋になると、もうすぐ冬が来るのかって憂うつにな

ったわ。でも、もうあれもクツションになっちゃったから今年はやっと明るい秋がく

ると思ったら、おばさん急におそろいの浴衣なんかつくり始めて……。

……。

あ、あおいのがいい！

……浴衣は青いのがいいのよ……。

え？

決まってるでしょ。ユリの花よ、ユリの。青いふちどりの方がいいに決まってるでし

よ！（と泣いて）もう大人なんだもの、赤いのなんて、赤いのなんて……。

咲子

赤のいい。

散子

青いのがいいって言ったくせに。

咲子

それは散ちゃんが赤が好きなんだと思って。

散子

嘘よ、あんたが青がいいって思ってるんだもの、あたしだって青がいいって思ってることくらい知ってるはずよ。だから頼んだのに、今まで何年も耐えしのんで今日やつと決意して、すこおく勇氣出して言ってるのに咲ちゃんは……いつもそう……いつもそう……。

咲子

散ちゃん、どうせあたし達、浴衣なんか着られないわ。昔、パパと三人で、おそろいの浴衣で夜店に出かけたことあったわよね。

散子

あ、あの時は朝顔の、同じ色の浴衣だったっけ。

咲子

でもきつとあたし達、もう外へは出られないわ。叔母さんはそんなあたし達に、希望を持たせようとして、浴衣なんか急に作ってくれるのよ。テレビで見たことあるもの、そういうお話。だからあたし達、叔母さん達の前ではとびきり明るく振る舞うのよ。病気なんかもう治っちゃったって顔するのよ、ね、散ちゃん。うん、なんだかあたし達、ほんとにとつても不幸せね。

散子

と、二人とも目を輝かせる。

と、ベッドより、三匹の犬、フランソワ、エミール、クリステイーヌ、鳴きながら飛び出す。

三匹

ワン、ワン、ワン。

咲子

あんた達、どうしていつもじっとしてられないの。

散子

あたし達が薄幸な病気の美少女でいられないのはこいつらのせいね。

フランソワ

ただでさえ残暑きびしい秋の初めに、これじゃガマン大会だよ。

エミール

でも良くもったよ、一時間だぜ一時間。

クリステイーヌ

死ぬかと思った、声も出せずに。

咲子

いらっしやい、クリステイーヌ、布団に入るのよ。

クリステイーヌ、おびえてそっと離れていく。

咲子

フランソワ、エミール。

フランソワ

僕ら、猫じゃないんだから……む、無理だと思えますよ、そういうの。

散子

あんた達が猫にならなきゃ、もう飼ってやらないわよ。

咲子

そうよ、病気の少女のヒザにはいつも猫が丸くなって、背中をなでると、ゴロゴロ

目をちゅちゅやくして、静かに眠るものなのよ。いらっしやい。

三匹

ワン、ワン、ワン。

散子

パパが出かける時に何て言ってる？ 咲子と散子のいうことをよく聞いて、姫君につか

える中世の騎士のように従順にかつ勇敢に二人を守っていきなさいって、あれ忘れた

の？ あたし達ふたりぼっち、あんた達だけをたよりに生きてきたのに。

咲子

散ちゃん泣かないで、この三匹は叔父さんに頼んでダンボールにつめてその川に流

してしましましょう。そして新しい犬を飼うの。「青い鳥」のチローや、ドロシーちゃ

んの飼ってたトトみたいに、私達の生活に役立つ犬を拾ってきましょう。

散子

でも、そんなことしたらパパに叱られるわ。

咲子

パパはもういなんだもの。そうよ、パパが死んじゃったら、こんな犬飼ってやることないのよ。パパだってあたし達が苦しむのを見たらそう言うわきつと。

フランソワ

小津さんが死ぬもんか。

エミイル

こんな時、小津さんがいてくれたらなあ……。

散子

じゃあやっぱり猫を飼いましょうよ。国中あげての猫ブームの時代に、犬なんか飼うのはベルボトムズのジーンズ穿くようなもんでしょ。

咲子

ああ、ここんとくに銀のボタンが並んでるやつ。

散子

ラッパズボンとかいって、

咲子

ダサーイ。

フランソワ

小津さんは猫が嫌いだった。

エミイル

猫なんてのは、ぐにやぐにやしてつかみどころがなくて、終りのない夢のようなもんだって。

フランソワ

こんな話聞いたら殴ってるよな。

エミイル

うん、いくら娘だって殴ってくれてる。

クリステイーヌ

クーン、クーン、クーン。

フランソワ・エミイル

ワンワンワン。

六郎、卓袱台を運んで入ってくる。

六郎

ホラどいたどいた。ごはんだよ、幸男。

赤ん坊を背負って子供の手を引いた未知男の弟幸男、食事を運んで現わる。

幸男 父さん、うまくたけたよ、ホラ。

六郎 うん、うまそうな赤飯だ。

幸男 母さんが帰ってくる前に、ごちそう並べて驚かそうな。

六郎 うん、未知男も喜ぶぞ。

三匹 ワンワンワン。

六郎 お前達もうれしいだろ、ほーら、タイの頭だ。タイの刺身は未知男も母さんも好物だ

からね。頭はお前らにやる。

幸男 咲ちゃんも散ちゃんも手伝ってよ。

咲子・散子 あたし達、病気だもん。

六郎と幸男、手ぎわよくごちそつを並べる。

幸男 じゃあ食べないのね、これもこれも、デザートのもロンも。

散子 メロンだって咲ちゃん、どうする。

咲子 だってあたし達、不治の病なのよ。

六郎 その年でハシカなんて、小津さん過保護だったんだねえ。

幸男 この子にうつらないかなあ。

六郎 うつしとけ、うつしとけ。大きくなってからのハシカはひどいぞ。さあ、できた。今

幸男
六郎

日は大安吉日、未知男の快気祝いと母さんの誕生日、うん今日は良い日だ。
知らないんだろ、兄ちゃんも母さんも
うん、内緒。

と、仏壇を開けると、小津さんの写真。

六郎

一応、小津さんにもね。

と、カネをならしておがむ。

三匹の犬が周りを走る。

幸男

うるさいなあ。

六郎

小津さんの写真を見せるとすぐこれだ。

と、仏壇をしめると、犬達おとなしくなる。

六郎
幸男

小津さんも死んでからまで迷惑な人だけど、憎めない人だった。
どうしてよ、しょつ中どつか出かけて、自分の子供の養育費すらも送金することなく、自由気ままに遊んでてさ、父さんも母さんも当然みたいな顔でゼーンブ尻ぬぐいして、こんな犬まで飼ってやってさ。

靖子の母親玉江が、ブーツと入ってきて座る。

幸男
六郎

こんなおばあさんの面倒までみてんだから、割合わないと思わないの？

いるんだよね、そんな奴って、なんかついついやらされちやうって奴。頼まれなくてもやってやっちやうって感じの奴って。「やあ！」なんて座られると、ついついお茶なんか出しちやうって、肩までもんでやりたくなる奴っているのな。この辺にサイフなんか置いといて、ちよつと他行つて帰つてくるとき、一万円札が足りないの、「アレ？」なんて奴の顔見ると、「貰っちゃったよ」なんてね、それでニコツとするのよ。で、ニコツとした奴の顔見ると、なんだか胸の中から熱いものがこみあげてきちゃって、「ごめん、気がつかなくて」なんて、サイフごと渡しちやうのよ。「いいの？」なんて、さわやかな顔されると、又、感激しちやうって「どうか、どうか使ってやっして下さい、私なんかニコツコツいじきたなく働いて貰った給料で、いばれるもんでもないけれど、どうかきれいに使ってやっして下さいね」なんて、かえって土下座しちやうたりなんかしちやうって。

幸男
六郎

いるかそんな奴。

いるんだよ、いるの、それが小津さんなの。なんか小津さん見ると、自分がいとおしくなってくるのよねえ。なんだか自分をほめてやりたくなるような、整理された気持ちっていうのかな、己によどみがなくなるのね。サツパリしちやうの。そうじ当番でもないのに、朝早く行つてさ、こつそり学校の便所そうじをひとりで済ませちやうてさ、教壇の上に花まで飾っちゃったりして、先生が「一体誰がこんな……」なんて言つても、教室はシーンとしてるのね。ヘソのあたりがムズムズしてきて、いい気持ち

幸男
六郎

ちなのね。口が笑うのを必死でこらえてると、学級委員が手をあげて「先生、あたし今朝早く図書室で勉強してたんですけど、窓から、北林君がバケツを持って、男子トイレに入っていくところを見たんですけど」「おお！」と歓声ともため息ともつかぬあつたかい声が教室をつつみ、先生が目頭を押えながら、私の名を呼ぶ「北林君」、いいよねえ、あの感じ。小津さんといると、年中あの感じよ。判らんかなあ、お前には。判りませんね。父さんはただ、小津さんが好きなだけなんじゃないの？
……。

幸男、ごちそうなどを並べかえ、お茶の道具などを運んでふと六郎を見ると、六郎の目に涙があふれているのに気づく。

幸男

父さん……。

六郎

そうだよ。私は小津さんが好きなんだ。小津さん、どうして死んだんだ。小津さんがいなきゃ、私がほんとはとつてもいい人間だということを証明してくれる人間が誰もおらんじゃないか、小津さん、小津さん。

と、仏壇を開ける。

と、犬が激しく騒ぐ。

幸男

父さん！

六郎、涙をふきふき仏壇を閉める。
犬達、おとなしくなる。

玉江 六郎さん、誰か死んだのかい？

六郎 小津さんですよ。お義母さんだって、知ってるでしょ。

玉江 ああ、青森のおじさんだろ。あれは戦死したんだ。丈夫で頭も良かった。

六郎 違いますよ。おじさんじゃなくて小津さん。

玉江 うん、青森のオズさん。

六郎 また、ボケたふりして遊んじゃって。そんなシャレはもう古いですよ、お義母さん。

玉江 一場の川のくだりでもう使ってます。誰も笑いませんよ。

幸男 笑わなくなっちゃっていいよ、コントやってる訳じゃないんだから。

玉江 おばあちゃん、まだ食べちゃだめだよ。全員そろってから。

幸男 今食べとかなないと、忘れちゃうといけないから。

玉江 何を。

幸男 食べたこと。

玉江 どうせ忘れるんなら食べなきゃいいのに。

幸男 そうしよ。

と、ハシを置くが、又食べ出す。

幸男 おばあちゃん。

玉江

忘れた。

声

ただいま！

六郎・幸男

母さんだ。

靖子、どっしりと現わる。

二人、ドキドキして反応を待つ。

靖子

何これ。

と、オカズをつまんで、新聞を広げる。

二人、ガツカリする。

幸男

そらないよ母さん、父さん五時間もかけて料理したんだよ。

靖子

だから、どうしたの？ って聞いてんでしょ。

と、横になって、オカズをつまみ続ける。

六郎

小津さんなら、小津さんなら、こんな時、すごいすごいって百遍も、千遍も、言っ
て、飛び回って腹鼓打ちながらアワ踊りまで踊ってくれるのになあ。いるんだよね、や
りがいのない奴って。

と、靖子と玉江を見る。

六郎 あんたらほんと親子だよ。俺はどうせ、ここじゃ唯一の他人だよ。

幸男 ええっ？

六郎 お前だってこいつの血を引いてんだ。ここに居る奴みんなそうさ。小津さんだけだった。小津さんだけが他人同士だった。血のつながりを越えたほんとの同志だったんだ。

と、仏壇を開く。犬が騒ぐ。

又閉める。犬おとなしくなる。

幸男 兄ちゃんが来るから、兄ちゃん、絶対喜ぶから。

六郎 ふん！ あいつもどうせこいつの血さ。

声 たいま！

幸男 兄ちゃんだ。

二人、ドキドキして待つ。

未知男 あれ？ 今日、法事かなんかあったの？

と、テレビをつける。

六郎

靖子

幸男

靖子

幸男

六郎

幸男

靖子

幸男

な？ ……な？ 俺もう実家に帰るよ。

何言ってるの、ここがあなたの実家でしょ。あたしが嫁に来たんだものここに。

あれ？ そうなの？ だっておばあちゃんいるじゃない。

他に身寄りもないから、一緒に来ただけよ。

なあんだ俺、今日まで父さんで婿養子なんだと思ってた。

……。

なんだそうか。あれ、でも小津さんて、母さんの姉さんの旦那さんだろ？ その小津

さんが、どうして父さんの家で暮してた訳？

他に家がないからよ。

なんか変だな。

と、双子を見る。双子、咳をして又寝こむ。

幸男

靖子

玉江

六郎

父さんてバカじゃないの？ 犬まで飼ってやって。

父さんは人が良いだけよ、ネエ。

そう、やさしいだけがとりえの人だった。(とおがむ)

私はまだ死んじやいないよ。小津さん、私はこうやって毎日しいたげられながら一生を終えるのでしょうか。やさしく静かに死を待つだけのみじめな人生。これが小津さんのいない人生です。小津さん、小津さん、もう一度、一目だけでもあなたに会いたい。

と、仏壇を開けようとする。

幸男、身がまえる。

未知男

小津さんなら、さつき会ったよ。

一同

……。

未知男

あれ？ まだ来てないの？ 先に帰るって言ったのに。

六郎

あのねえ。

幸男

父さん、ホラ、兄ちゃんアレだから、ね、三カ月前のこと言ってるわけよ。兄ちゃんにとつての三カ月前。

六郎

そうだった、未知男、お前にはまだ言っていなかったが。

未知男

え？

六郎

少しずつ現実には慣らすために、小津さんのことはあとにしようと思ってたんだ。

幸男

兄ちゃん、小津さんと気が合って、良く一緒に遊んでたものね。

未知男

うん。

六郎

だから、それもあつて言わなかった訳だが、小津さんね。

未知男

うん。

六郎

死んじゃったんだよ、十年前に。お前が人事不省におちいつてからすぐにね。アフリカの原住民に頭の皮はがされて、ホラ（と仏壇を開けて）。墓は、横浜の方に、父さんが無理してりっぱな奴こさえてやったから。

犬騒ぐのですぐに閉じる。

未知男

え？ で、でも……。

と、ハジメの声。

ハジメ

ごめん下さい。

幸男

あ、ハジメちゃんだ。

六郎

えっ。

幸男

父さん、兄ちゃんのクラスの友達や先生も呼んでやれって言ってただろ？

六郎

お、そうかそうか。

ハジメと木原綾子、現われる。

ハジメ

わあ、すげえな、すごいすごい。

とすごいを連発して、綾子とともに腹鼓を打ちながらアワ踊りを踊ったりして喜ぶ。
六郎、顔がダラーとほころんで、ヨダレが出んばかり。

六郎

き、君達、見どころがあるねえ。私は君達のような人間を待っていたんだよ。ささ、こちらへ、こちらへ。いやあ、いたんだねえ。いたんだねえ。ええつ、ミ、未知男の友達かい？ ええ？ いやあ、良かった、生きていたか良かった。ささ、どうぞ、

どうぞ。

ハジメ

いやあ、すごいごちそうですね。久しぶりですよ。

綾子

ほんと、東京オリンピック以来ですわ。こんなにすごい。

六郎

そうかい、そうかい。全部食べてくれ、全部。これはね、これも、これも、これも、全部、君達二人だけのものだよ。あとは誰にも食わせん、誰にも。

と、つまもうとしていた靖子の手を叩く。

綾子

お母様、お誕生日おめでとうございます。

と、プレゼントを出す。

綾子

そして未知男さんも、すっかり良くなっておめでとう。

と、プレゼントを出す。

ハジメ

僕は、急だったんで何も買ってこられなかったけど、母がこれを持って行って、売りもんで悪いけど、うちの饅頭です。

六郎

まあ、まあ、これはこれは、ほんとに。ほんとに気を使っていたでいて、いたんだよ、いたんだね、こんな世の中にも、清らかに澄んだ人達が、どうも、どうも。

と、プレゼントを受け取ると、仏壇を開けようとして、犬に気づき、戸を少しだけ開けて。

六郎

小津さん、後で饅頭二人で食べましょうね。

と、話しかけ閉めると、仏壇の前にプレゼントを積みあげる。
靖子と未知男、ポカンとしている。

幸男

母さんも兄ちゃんも……ほんと、父さん、二人を喜ばせようとして、仕事休んで頑張ったのに、兄ちゃんが起きてから、色々忙しかったろ？ 俺は失業しちゃって女房に逃げられるしで……。だから、母さんの誕生日に、兄ちゃんの快気祝いも一緒にやろうって。これ、一月前から考えたメニューなんだよね。

靖子

言ってくれば、あたしだって……。

幸男

見りや判るだろ。見りやさ。タイの刺身だってあるのに。

靖子

アラ、ホント。

と、手を出そうとして、ひっこめる。

六郎、そっとレコードをかけて、やるせない悲しい曲を聞いたりしている。

幸男

父さん、俺、アパート探すよ。そしたら、そこで二人で暮そう。別れちゃえよ、母さんと。今流行ってるんだぜ、高年期の離婚。

未知男

サツちゃん、鼻水たれてんぞ、かめよホラ。(とティッシュを出して) 兄ちゃん、かましてやろうか？

幸男

よせやい！ 俺もう中学生じゃないぞ。これでも、すでに人の子の親だい！ 兄ちゃんなんか、兄ちゃんなんか、まだ高校生じゃないか！ 俺なんか、逃げた女房もいるんだぞ！

変ないばり方するなよ。

未知男
幸男

兄ちゃんなんか嫌いだ。俺のこといつもバカにして。追いかけても追いかけても、いつも先に行っちゃって、俺、いつも置いてけぼり食わされて、女房に逃げられたのも兄ちゃんのせいだからな。俺、兄ちゃんが眠っている間、必死に先に行こうと思っただ。兄ちゃんが追いかけてきても、絶対届かないようなとこまで行こうって。先に大人になって、先に結婚して、子供つくって、兄ちゃんより先に、父さん達喜ばそうって頑張った。兄ちゃんの分も、兄ちゃんの分も頑張った。俺、兄ちゃんより大人だからな、ホラ、兄ちゃんよりずっと大人だろ、俺。

未知男

幸男

靖子

未知男

靖子

そらないよ母さん。サツちゃん、きちんとやってるじゃないか。じゃどうして女房に逃げられんの。こんな幼い子供を残してさ。ほんと、だからあんなに反対したのに。

未知男

仕事が決まったら戻ってくるさ。サツちゃんの奥さんだもの、きっと何か事情があるんだよ。

靖子
未知男

仕事までやめちゃって、どうするのこれから。

サッチャんのせいじゃないよ、国のせいだもの。国鉄ももつと考えりゃいいんだよな。運転やめさせて、急に弁当売なんて言われたって、サッチャんだってなあ……。

兄貴づらしてかばってくれなくてもいいんだよ別に。出てくよ。すぐに出てくよ。出てきゃいいんだろ。

靖子

幸男！

六郎

いいよいいよ、俺が働くからね。まだまだ若いんだ。

靖子

ひとりで働いているようなこと言わないで下さいな。あたしだって老体にムチ打って塾行つてんだから。

綾子

お母様、学校退職してどのくらいになりますの？

靖子

もう五年です。この子達さえしつかりしてくれてれば、おばあちゃんおばあちゃんて呼ばれて、縁側でうたたねしてますものを。

綾子

塾の先生も大変なんでしょうね。

靖子

近頃の中学生はねえ、体が大人で、頭が子供でしょう。扱いづらいつたらないわよね。

綾子

お母様、私もずっと今の仕事を続けて参りますから、未知男さんを私に下さいませんか？

靖子

は？

綾子

あたし、未知男さんを引き取って、りっぱな大人に育ててあげてみせますから。

六郎

それどういうことです？

綾子

あたし、未知男さんと結婚したいんです。

靖子

この子、まだ高校生ですよ。

綾子

でもこのままじゃ大変でしょう。これからの授業料だって、大学の入学資金だって、あと五年以上あるんですよ。

幸男

あのう……。

綾子

あたしももう二十七ですから……、あと五年も待てないんです。今すぐにでも結婚して、子供だって早目に生んどかないと……。〔未知男、あいた口がふさがらない〕

ハジメ、未知男をつつく。

未知男

あ、あのう……。

綾子

あたし、このごろ心臓が悪いみたいで……。血圧も下がりっぱなしで、貧血気味なんですよね。医者に行ったら、ホルモンのバランスが良くないんですって。結婚すれば治るっていうんです。

六郎

結婚すると治るんですか？

綾子

ええ、ホルモンが刺激されてバランスがとれ、すべての体の機能が正常に戻るらしいんですね、結婚すると。人間の体はそういう風にできているらしいですね。

幸男

それは……その、セックスのことですか？

綾子

そう、セックスです。ほどよい定期的なセックスで、すべての病がいやされると、医者が主張してやまないのです。

靖子

それなら別に、うちの未知男でなくともねえ。

綾子

ここまで待ったのに、今さら、他のその辺にころがってる男じゃあ、ねえ。

靖子

え？

ハジメ

木原先生は処女なんだそうです。

一同

……。

六郎

二十七で……ですか？

ハジメ

今朝、僕も念を押してみました。

幸男

あり得ることですよ。兄ちゃんだって、童貞なんだし。

六郎

どうする？ 靖子さん。

靖子

未知男に聞いてみないと。

未知男

僕……だって、僕……やだよ。高校生だぜ、やだよ、担任の先生と、そんな……。

六郎

でも体は二十七なんだし……。それに、親子二代に渡って担任の教師と教え子が結婚

ハジメ

するなんざドラマだよ。

ハジメ

え？

六郎

君らは知らんだろうが、私だって、この靖子先生の教え子だったんだから。それも、

高校じゃないからな、中学生だったんだから、父さんは。父さんが十五、母さんは二十三歳の新任の教師。最初は、父さんの片思いでね。ホラ、優しい先生にあこがれる

——少年の甘くせつないあの思いさ。卒業してからも文通を続けて……父さんいはずだったからね、ほんと純心だった、母さんがやっとうんと言ってくれたのは、父さ

んが二十二歳の時だったかな。いや全くまさか一緒になれるなんてねえ、ねえ。

幸男

父さんが夜、「先生、先生」って寝ごと言うの、あれ母さんのことだったのか。

靖子

こっちは恥ずかしかったわよ。今みたいに、五月みどりも原辰徳もない時代だった

し、一緒に住んでたらしよつ中下宿のおばさんに間違われてさ。

綾子

あたし達は同い年ですから。

六郎 そうね、問題ないね、いいんじゃないですか、ね、先生。（と靖子に）

未知男 僕、まだしたくないです。セックスなんて。

六郎 奥手だね、ゲイなんじゃないの？

靖子 ゲイはあんたでしょ。小津さん小津さんて気味悪いつたらありやしない。
六郎 な、な、な、小津さん、先生あんなこと言ってる。

と、仏壇のスキ間に。

身構える犬達。

玉江 お茶。

靖子 えっ。

綾子 あ、あたしが入れますわ。

靖子 あら、すみませんねえ。

未知男 いいですよ先生、僕がやります。

幸男 お似合いつて感じするねえ。

ハジメ、吹き出す。

犬達が激しく鳴いて外に飛び出して行く。

靖子 どうしたのかしら。

未知男 小津さんだよきつと。

靖子

え？ あらあなた、どこ行くの？

六郎、白い手袋をはめながら。

六郎

仕事行ってくる。

靖子

これから？

六郎

うん。ビュンビュンやってくる。今日は朝まで運転する。なんだか、血が騒ぐ。明日への希望が沸いてくる。

と、去る。

靖子

どうしたのかしら父さん。気を悪くしないでね。皆さんゆっくりして下さいよ。まだ沢山残ってるし。

玉江

ええええ、いただいてますよ。

未知男

父さん変わったね。

靖子

ええっ。

未知男

舟に乗ってるころは、もつと寡黙な人だった。三月前までの父さんは、真黒に日焼けして汗臭くて、背中が大きくて、時々白い歯を見せて笑ったけど、あんまり喋るのを見たことがなかった。夜遅く帰ってくると、きつかり、とっくり一本分のお酒を飲んで、布団に倒れ込むようにしてグーグーいびきをかいてた。僕、父さんと二人きりになって話したことってなかったな。父さんがあんなに喋るとこ見たことなかった。

靖子

あんたがおかしくなってるからよ。父さん変わったの。この十年で、何かを追いたてられるようにして喋り始めたのよ。あ、違うわ。小津さんが死んでからだわね。そうだわ。小津さんの骨が届いてから、急に変わったんだ。そう言えば、小津さんにちよつと似てきたみたいね、あの人。

幸男

きつと寂しいんだ父さん。

靖子

一緒にいた頃はケンカばかりしてて、小津さんが出かける時には、二度と来るななんて、追い出すようにしてたのに。

遠くで犬達の騒ぐ声。

幸男

うちの犬だ。

未知男

僕、ちよつと見てくる。

靖子

未知男。

未知男

すぐ、戻るから。

舞台暗くなり、双子のベッドだけが明るい。

散子

咲ちゃん、パパが戻ってきたのかしら。

咲子

だって、パパは死んじゃったのよ。

散子

でも、犬達が騒いでる。

咲子

きつとさかりがついたのよ。

散子

咲子

今頃、急に？

ホルモンのバランスが乱れたんじゃないの？

あたし達も乱れることあるかな。

思春期だもの、今が一番あぶないのよ。

でも、あたし達結婚できないんでしょ？ 病気にならないかしら。

初めから病気なんだから。乱れすぎる前に死んじゃうわよ。

あたし達って可哀そう。処女のまま死ぬのね。

永遠に熟すことを知らぬ青い果実。花開くことのない白いつぼみ。あたし達、寒い寒い北の国に行つて、氷の湖に沈みましようか。若いまま腐つて行くのは、なんだかお

ばあさんよりも醜い気がする。

冷凍しちゃうの？

うん、誰も知らない湖の底でひっそりと時を止めて、未来の探検家を驚かしてやるのよ。

瓜二つの美少女が、鏡のように向かいあって眠っていたら、若い探検家達は、白馬の王子に変身するかしら。そしたらあたし達、死の眠りから覚めてしまうかも知れない。

ドキドキするわね。

うん。

明日行こう。

うん。ちよつと眠つてから。

うん。ちよつと眠つてから。

川の側に立つ未知男。

未知男

小津さん！ 小津さあん！

遠くで犬の声。

未知男

変だなあ、どこ行ったのかな。小津さあん。あ、あれは。

川の向こうから、小舟がゆっくりとやってくる。

未知男

舟だ、父さんの小舟。でもおかしいぞ。もう舟は使ってないって、父さん言ってたもの。でもあれは父さんの舟だ。人がいる。人が乗ってる、あ、立ってる。あぶないですよ、立っちゃ、立っちゃダメですよ！

小舟がゆっくりと近づいて来ると、白い日傘をさした若い女が立っているのが見える。

フツと空気が動き、頬に冷たい風が走る。

女、ゆっくりと日傘をずらし、美しい顔をこちらに向ける。

未知男

あなたは……。

女
今晩は。

女 私は風子。

未知男 風子？

女 風の子と書いて風子。

未知男 それでですか。さつきから涼しい風がそよぎはじめた。風の止まったこんな季節に、めずらしい風だ。

女 フフフフ。

未知男 そんなフフフと、笑わないで下さい。

女 だって私は風子だもの。

未知男 シャレですか。

女 こんなロマンチックな夜の闇に、ダジャレで星を笑わせるのも、若い男女には許されるものよ。

未知男 僕は若いですか？

女 少なくとも私は若いわ、ハタチだもの。

未知男 僕は十七。

女 十七？

未知男 いえ、二十七。

女 どっちなの？

未知男 あなたの前では十七です。

女 暗くてお顔が良く見えないわ。

未知男 こちらからはよく見えます。月明りでしょうか、とつても白い。

女 お月様？

未知男

いえ、あなたの顔。

女

あんまりお外に出ないものだから、顔色が悪くって。ごめんなさい。

未知男

ご病気でも？

女

いえ、この時分になるといつもお外に出たくなって。

未知男

この時間ですか？

女

ええ。

未知男

この時間になると、あなたはいつもここに来るんですか？

女

ええ、毎日。でもあなたに会うのは初めてね。

未知男

ええ。この時間はいつも眠ってましたから。(腕時計を見て) 十一時だ。あなたが十一時に毎日ここに来るのですしたら、僕は、明日もあさつても、きっとここに来るような気がします。

女

どうして？

未知男

判りません、でも。

女

でも？

未知男

なんだかあなたが、すぐに行ってしまうような気がして。

女

ええ、あたし、もうすぐ帰ります。

未知男

こちらに降りないのですか？

女

ええ、行ったり来たりが好きなんです。でも、いつかそのうち、そちらに行きますわ。

未知男

今日はさようなら。
ええ、さようなら、

女、遠ざかって行く。

未知男

明日もここに……。

女

さようなら。

未知男

あの、きつとここで。

女

さようなら。

と、ゆっくりと消えて行く。

未知男

さようなら。

未知男、うっとりとしたと、岸辺にたたずみ、頭の中の甘いメロディーをまさぐっていると、いつの間にか小津さんがぴったりとくっついていた。

小津

(甘くささやく) どうしたの？

間。

未知男

わっ！

小津

やあ……。

未知男

お、小津さん。

小津 どうしたの？ 寂しそうな顔しちゃって。

未知男 寂しそうな顔してます？

小津 してるねえ。

未知男 どちらかと言うと、楽しいんだけど。

小津 じゃあ笑えよ。ハハハア。

未知男 ……そんな気には……。

小津 じゃやっぱ寂しいのさ。

未知男 小津さん、家に帰らなかつたんですね。

小津 うん？ うん。

未知男 みんな小津さんのこと、死んだと思ってますよ。

小津 うん、そうだろう。

未知男 いいんですか？

小津 いいんじゃないの？ ほんとなんだから。

未知男 はあ……えっ？

小津 いやね、あ、こら死んじやつたなって思った時にはもう舟に乗ってましたよ。例のホ

ラ、三途の川？ アレね。遠くの方で太鼓の音が聞こえてて、目をこらして舟の方向を見るとお祭やってんです。和風とも洋風ともつかない、カーニバルみたいなね。もつと良く見ると、こうツノはやした小鬼が大勢集って太鼓たたいてる。この良く見るとっていうのがカンジンで、目で見るというより、見ようとするで見えてくるといった感じで、五感の機能がどうもいつもと違う訳です。この意志を働かせると判つてくるといったような、感覚の世界とでも言うのかね。後ろを振り返ると、生きたこの世

未知男

小津

未知男

小津

未知男

小津

未知男

小津

未知男

小津

の顔見知りの連中が、帰ってこいよと手を振ってる。でもこれがなにか、ぐったりしてる。精気のない醜い顔でおいおいと叫んでる。向こう岸を見るとすごい活気だね。明るいなあこれが、ワイワイ楽しくやってんの。なんか帰る気がしなくなっちゃって、行っちゃったよ。君だってそうするぜ、きつと。で、着いちやってさ、一緒になってワイワイやってんの。ひとしきり。そのうち疑問が生じてきてね。死んでこんなことやってアホじゃないのかって。で、そう思った途端に、ニューと現われましたよ。こんなのが、例のホラ、何だっけ？

何です？

孤独な中産階級がホラ、通勤電車なんかで読んでる雑誌があるだろ？あの、自殺したタレントのノウミソがダラーと、ホラ。

フォーカスですか？

違う違う。

フライデー。

違う、違う！ ああ！ ここまで出てるんだけどなあ。話を変えようか。

何言ってるんです。そこまで話して。

いや、物事に角をたてたくないんだよ。おだやかにまあるく、円満にねえ。エンマンに……、そうだよ！ エンマだよエンマ。エンマがニューと出て「この千三つ野郎、地獄に落ちろ！」って指さすんです。でね、ほんと落ちちゃって、気がついてみたら、ここだったんですよ。ここが、この、この世こそが地獄だったんですよ。

またあ。

私だって嘘かと思った。でもホントだったんです。だって私、れっきとした死人です

未知男

小津

のに、君とこうして話してる。いやあ、人間死んでみな判らへんもんや、百年生きたかて、経験でけへんもんもありまっしえー！

へ々な関西弁使うなよ、小津さん茨城だろ？

いやいや。

アホなこと言うてんと、はよ家帰りましょや。

いやいや。

ええから。

(急にシリアスに) 星だ。もうちよつとここに居よう。

……。

君は何してたの？ こんなところで。

小津さんを探してたんですよ。そしたら、父さんの小舟があちらから。

え？

女の人を乗せた小舟がここに。

君、夢でも見たんじゃないの？ 舟はもう動かないよ。六ちゃん漕ぐのやめちやつて、

物置ききの屋根の上にくくりつけてあるはずだろ？

でも、さっきまでここにいたんです。舟の上の美しい人が。

美しい人？

ええ。そして風の人。

風の人？

風子という名の風を生む人。

何だつて？ 風子？ その女は風子と名乗ったのかい？

未知男

ええ、毎晩きっかり十一時に、あちらからこちらへ渡ってくるのだと云ってました。

小津

……。

未知男

どうしたんです？ 急にシリアスな顔しちゃって。

小津

私は初めからシリアスな人物だよ。しかし、元来シリアスな私が最もシリアスにきめるべき時が訪れたようだ。

未知男

というと？

小津

その風子は。

未知男

風子は？

小津

私の女だ。

未知男

……。

小津

私の女と言いたい女だ。

未知男

は？

小津

女房なんだよ。れっきとした妻でありながら、なんか永遠に俺の女だと言いたくなるようなそんな女が風子なのさ。

未知男

……、でも……若かった。

小津

若いさ風子は……。

未知男

でも小津さんの奥さん、死んじゃったんでしょ？

小津

ああ、心臓でね。

未知男

それなら。

小津

死んだ私がこうしてるんだもの、アレだって判らんさ。

未知男

そんなバカな……。

小津 君ね、みっちゃん。

未知男 え？

小津 君、惚れちゃったのね。

未知男 は？

小津 その目、風子に惚れたね？

未知男 そんなことは。

（すぐに）あるんだよね。さつき君の周り花が咲いてたね、君の頭だけ音楽鳴ってたっけね。うん、「初恋」と書かれた本の表紙のさし絵にたたずむ、ウブな少年のそれじやないかと私は思うよ。

未知男 ……あの人は若かった。咲ちゃん達のお母さんとは違いますよ。

小津 幽霊といったものは、人生の中で一番激しかった部分のままに出てくるものだと思は

思うよ。風子がハタチのあのままに毎夜こちらに現われるのだとしたら、私は……。あの人は幽霊なんかじゃありません。明日、明日の十一時、小津さんも一緒にここに来るんです。そうすれば判ります。

小津 いや、それは……。風子は私に会いに来たんだ。でも、私には……。

未知男 どうしたの？ 小津さん。

クリスティーヌ、そうっと現われる。

小津さんのふと見上げたその視線とクリスティーヌのそれとがピッタリと一致する。と、騒がしくフランソワ、エミールが現われる。二匹、余りの感激に、しばし動けず、ボー然と立ちつくす。

小津さんと三匹、目だけで、気持ちのやりとりをひとしきり。
突如激しく抱き合う。

未知男

さつきまであんなにほえていたのにやけに静かだな。

小津

余りの嬉しさに、口がきけないらしい。

未知男

口がきけないのは犬だからですよ。

小津

みっちゃん、君、変わったな。犬は口がきけないって？ そう、よそのその辺の犬つ

ころならそうかも知れないさ。しかしこれらは私の犬だよ。え？ 私の助手である、
小津研究団技術職員が口がきけないはずはないじゃないか。

未知男

小津研究団？

小津

忘れちゃったの？ あれえ？ 君もメンバーのはずだったろ？ 僕も入れて入れて

って泣いてすぎるもんだから、渋々団員証くれてやったじゃないか。あれどこやった
の、あのバッヂ。

未知男

それいつのことです？

小津

ホラ、私が川原でこいつら拾ってきてさ、おばあちゃんに捨ててこいつて怒られて、

泣く泣く自転車で川下の方まで行かされただろう。君のおしめのとれた初めての日
でさ、みっちゃんも行く、みっちゃんも行くって騒いで、自転車の前に乗つけて連れて
ってやったろ？

未知男

ええ？

小津

覚えてないの？ 頭悪いなあ。三十年も経ってないのに。帰りはひどかったよね、シ

ッコもウンコもたれ流しで。ずいぶん出たなあ、あん時、ズボンの後ろパンパンモッ

未知男

コモッコだったじゃない。あれ、全部、私がフキのハツパで手当てしてやったの忘れたの？ 下半身がゆるいのって、あれ、遺伝だつてね。六ちゃんなんか口には出さないけど、未だにあるらしいぜ、雨が降ったりすると、さそわれて。前に見たもの、庭のグミの木の下に、ウンコパンツ埋めてるところ。君だつて月に二、三度あそこに異常にハエがたかるの知ってんだろ？

うん。

小津

あそこ掘り返してみろ。干からびたウンコパンツ百や二百は出てくるから。あれ？ 何の話してたっけ。

未知男

小津研究団の話です。

小津

そうそう、あの日だよ、君が団員になったのは。

未知男

二つや三つの頃のこと、覚えてませんよ。

小津

でもあの時の君は真剣だったぞ。……じゃあさ君。人が、会社とか劇団なんかに入っ

未知男

て三十年たつてさ、どこに入ったんだつたか忘れちゃうってことあるかな。

未知男

さあ……。

小津

ないような気がするよ、真剣にやってたらの話だが。君は団員として真剣にやってこ

なかつたから忘れちゃったんだよ。こいつらなんか一日だつて忘れたこたないよ、な。

三匹、うなずく。

小津

君と、この子たちとは同期だよ同期。同じ日に入団したんだもの、な。

三匹、うなずく。

未知男

でも、その研究所はどこにあるんです？

小津

ここだよ。私こそが小津研究団だ。どこにだって移動可能な、生きた研究団だ。

未知男

何を研究してたんですか？

小津

その時その時に私が興味をそそられるすべてのことを研究していたんじゃないか。奥

の間の押し入れの中で良く秘密会議を開いただろ？ 君だつてかかさずに参加してたのに、忘れるんだねえ。たぶんバカなんだよね、君つて。判つた、もう君には退団してもらおうよ。うちはね、ツーといえればカー、打てば響くといった、有能な団員しか必要とせんのだよ、別に縛つてる訳じゃなし、やる気のある奴しかとらんのだようち

未知男

劇団？

小津

毎日毎日ゲキ務だし、仕事柄、ゲキ薬も扱うからね。

未知男

は？

小津

いいからバッチ返したまえ。

未知男

バッチ？

小津

やつたる？ ……まさかなくしたんじゃないだろうね。

未知男

あの、どんなだったか。

小津

見せてやれ。

三匹、ポケットの中から出して見せる。

未知男

小津

このお相撲さんは誰です？

ええ？ 忘れちゃったの？ 若秩父だろ？ 若秩父。君、だあい好きで、どんなにオ

ギヤーオギヤー泣いてたって、これ見したらニッコニッコだったろ？ ホラ、小学校

の頃、角の「八百安」のオバサンお気に入りだったろ？ 用もないのに毎日通って、

ある日学校帰りに、思いつめちやって、「オバサン、僕と結婚しよう」なんて迫った

ろ？

「どうしてそんなにオバサンが好きなの？」ってオバサン、柄にもなく真赤に

なっちゃって、そしたら君、「だってオバサン若秩父にそっくりなんだもの」って、あ

れでだよ。オバサン、店たたんで引越しちゃったの。あんなに入れ込んでた若秩父、

君、忘れちゃったの？ このメンコをバッヂにしたのだって、君がそうしろってごね

たからなの。くそう、こんなことなら、やつぱり明武谷みんぶたににしとけばよかった。私は

ね、私は、アンコ型のポチャポチャより、ソップ型が好きなんだソップ型が。

ソップ型？

小津

鳥ガラのスープが語源なの！ やせてひよろつとでつかいの、私はあれが好きだった

んだ。明武谷のファンが若秩父のバッヂを泣く泣くつけてんだぞ。

未知男

ハア……。

小津

野球ファンにはできない芸当だぞ……それを涙を飲んでゆずってやったのに。大鵬柏

戸の黄金時代に、君と、私の二人だけは信念を曲げずに若秩父う！ 明武谷い！ と

やっとなんだ。それなのに、それなのに。

フランソワ

ワンワンワン。

小津

そうか。

エミイル

ワンワンワン。

小津

そうだな。

クリステイーヌ

ワンワンワン。

小津

よし、行こう。

未知男

小津さんどこ行くの。

小津

今言ってたろ。

未知男

誰が。

小津

彼らが。

未知男

ええ？

三匹

ワンワンワン。

小津

昔は良くみんなまで語り合ったのに彼らの言葉が判らんようになってしまったのかい？

君がバツチをなくしたからだぞ、だからこの子らが口がきけないなんて言えるんだ、

なあ。

三匹

ワンワンワン。

小津

そうそう、ハハハ。

未知男

小津さん。

小津

君が判らないのは判ろうとしないからだ。頭の中の眠った脳ミソをゆり起こして、記

憶の糸をたぐれ、そうして思い込むんだ。疑っちゃいかん、自分自身を信じるんだ。

ホラやってみる。

はあ……。

未知男

夢と現実、内側と外側が一直線上にあったあの頃、優しさと寂しさが、言葉ではなか

未知男

またあ。

小津

やっと砂漠を越えたんだ、早く心臓を取り返そう。

未知男

心臓？

小津

丈夫で優しい取りたての心臓をね、カカシに横取りされちまって。カカシめ、脳ミソだけじゃおさまらず、心臓まで手に入れようとして。

未知男

カカシは善玉じゃなかったんですか？

小津

人が変わったんだよ、脳ミソのせいだ。ま、カカシが人になった瞬間から、欲望のとりになつちやつたつて訳。ものには欲がないだろ？ だからものでいられたものが、急ゲキに人になつちやつたら君、急ゲキに欲が露出しちやつて、本物の政治家になつちやつたのね。おかげで風子が……。

未知男

え？

小津

風子の心臓さ、横取りされたのは、風子に移植するはずだった心臓だ。だからあいつここんとくにポツカリ穴があいてんだ。早く心臓埋めこまないと、あいつはどこにも行けやしない。あの世にも、この世にも。毎夜毎夜死の砂漠を行ったり来たりのだだの影になる。

未知男

砂漠？ この川のことですか？ それはたとえの砂漠でしょう？

小津

いいや、ここは砂漠さ。渡るに渡れぬ川のようにだと、人々がたとえを言ううちに、砂漠自体がたとえを語るようになり、たとえの川になったのさ。この砂漠は、自らたとえを語っているんだ。

未知男

じゃあこの川は自らのたとえにおぼれたんですね。

小津

ああ、暗喩におぼれた無邪気な川さ。思い込みの激しい川だ。

未知男

思い込みで砂漠も川になるんですね。

小津

黄色いレンガ道、見つけたか？

フランソワ

はい、ここに。

小津

よし、これをたどって行けば嫌でもエメラルドの都に着くはずだ。

未知男

何も見えませんが……。

小津

思い込み！

未知男

あ、見えてきた。

小津

行くぞ！

一同

おう！

と、一同、思い込みで出現したレンガ道に消える。
ベッドが明るくなる。双子の少女、ガバと起きる。

散子

咲ちゃん恐いわ。

咲子

夢よ散ちゃん、夢を見たのよ。

散子

心臓がムズムズする。血が川になったみたい。

咲子

あたしもよ。こんな時抱きしめてくれる大人が欲しいわね。二人で抱き合ってたって、

散子

あたし達ってソツクリだから……。

咲子

散ちゃんはどんな夢？

散子

咲ちゃんは？

咲子

夏の夢。川が、あの川が氾濫してあたし達を飲み込むの。川が激しい夏を乗せてこちら側へ押しよせ、私達の家も、林も、街全体がその中に沈んでいく。

散子

そう、川が夏そのものになって、私達を焦がして行き、街がかげろうのようにかすんで行く。あれは夏、なぜ夏なのかって、それは……。

咲子

そう、それは形ではなくて、何か抽象的な、見えているけど見えないもので、そんな大きな抽象に飲まれたあたし達も、そんな抽象の夏に変わっていく。

散子

あれは何かしら。

咲子

とつても怖い。

散子

夏が怖いなんて。

咲子

恐くてどうにか目覚めようとする、私がいらない。

散子

怖いと思った私がいらない。

咲子

誰もいない砂漠がそこにあるだけ。

散子

常夏の砂漠に、いないあたし達。

咲子

心臓がムズムズする。

散子

咲ちゃん、恐くてあたしもう眠れない。

咲子

でも散ちゃん、眠らなきゃ、明日が来ないわ。明日が来なきゃ、いつまでも出かけられないもの。

散子

咲ちゃん、手えにぎって。

咲子

うん。猫飼おう、猫は私達の代わりに夢を見てくれる。

と、二人、横になる。

北林家の茶の間で、靖子が手酌でビールを飲んでいる。
玉江、幸男、幸男の娘、信子、綾子、ハジメがケーキを食べている。

靖子 遅いわねえ未知男、どこまで行ったんだろ。

幸男 もう十二時だぜ。

玉江 雨かい？

幸男 ええ？

玉江 十二時なのに暗いからさ。靖子、昼ごはんまだかい？

靖子 まだずうっと先。

玉江 ケーキだけでも先に食べたいな。

幸男 今食ってんのなんだよ。

玉江 これはところてん。

幸男 綾子さん、もう遅いですから、帰った方がいいんじゃないですか？

綾子 あたし、未知男さんが帰ってくるまでは……。あの、お返事いただかないと、明日か

らの生きていく糧が……。

幸男 ハジメちゃん。

ハジメ 僕も明日、日曜だから、あんまり急がないんだ。歯ブラシも持ってきたし。

綾子 あたしも持ってきた。

幸男 母さん、うち、そんなに布団あったかな、ねえ。

靖子 起きてりやいいんだよ。寝なきや布団なんかいらなんだから。

幸男 母さん酔ってますね。

靖子
それがどうした。

幸男
ついこの前も二日酔いで、もう酒やめたって言ったばかりでしょう。

靖子
飲んじゃったもん仕方ないよ。飲んじゃったら、やめられないの！ それ知ってるくせに、お前ビール出すんだもの。

幸男
一杯だけって言ったの母さんだろ！

靖子
バカだね、何年親子やってんだよ。一杯で済む訳ねえのお前が一番知ってるくせに。

幸男
ホントにホント一杯だけ、誕生日に嘘はつかないって土下座してせがんだの誰よ。

靖子
いいからお前もホラ。

と、無理矢理注ぐ。

幸男
母さん、もう十二時だよ。これ以上飲んだらホント、残っちゃって、二、三日寝込ん

じやうぜ。いつだってそうだろ？ もう帰ろう。

靖子
ダメダメもう一軒、もう一軒回ってから。

幸男
いつもそうやって、朝方まで何軒もハシゴして、次の日、なんで終電で帰さなかったんだって、俺のせいにして怒るくせに、ホラ、帰るよ。

靖子
もう一軒、ホラ、あそこ行こ、あそこ。二時までやってつとこ。派出所の斜め向かいの「ゴンちゃん」。

幸男
ダメダメ立ってホラ、おカンジョーお願いします。

と、綾子に。

綾子
幸男

あの……。
ん？

と、周りを見渡して落胆して座る。

幸男

ここ家だったんだねえ。

ハジメ

帰るって訳には行きませんねえ。

綾子

初めっから帰ってる訳ですから。

幸男

うるさいんだよ。君達もう帰ってくれる？

ハジメ・綾子

いいえ。

靖子

うん、うん、こっち来て、飲も飲も、まだ十二時なんだから。

幸男

ダメダメ、母さんはもうダメ。もう寝た方がいいよ。布団敷いてやるから。

と、片づけなどやりながら。

幸男

君達、勝手にやっててよ。俺もそろそろ寝ちやうから。

ハジメ

先生、饅頭食う？

と、勝手に仏壇の前の饅頭の箱を開け綾子に渡す。

綾子

ありがとう。

幸男

おばあちゃんも、もう寝なよ。

玉江

昼寝すると夜眠れなくなっちゃうから、寝ないよ。

幸男

老人性時差ボケってのもあるらしいな。母さん、そんなとこ寝ちやダメだよ。布団敷くから。

と、押し入れを開ける。

音楽。

未知男、小津、犬三匹が、押し入れの中に詰まっていた。それぞれ、緑色の色メガネを掛けている。

人々、ア然。眠っちゃってる靖子。

幸男

ややや！

小津、颯爽と登場。続く犬達と未知男。

奥には黄色のレンガ道。

小津

着いたぞ！ 長い旅だった！

未知男

ここがエメラルドの都なんですか。

小津

そうだ。人も動物もみんな緑色をしているだろう。

未知男

そうですね、みんな緑色だ！

小津
緑色のタンス、緑色の卓袱台、まさしくここがエメラルドの都。

饅頭を食べようとしていた、綾子とハジメ、我に返る。

綾子

こんな時にかくれんぼしてたなんて、未知男さんたら残酷な人。十年待った私だけけど、今の一時間はそれ以上に長かった。早くあたしをここから出して！ せつない片恋の鳥カゴの中から。私を自由にできるのはあなたしかいない。

ハ？

英語の先生だからさ、少々翻訳調になっても許してやりなよ、ね。

未知男

ハ？ 君達は一切……。

小津

きつとエメラルドの都の純朴な住民達であろう。

ハジメ

あなたは？

小津

小津研究団団長、小津達一郎とは仮の姿、その実体は、このオズの国をおさめる本当のオズ大王である。

ハジメ

オズの国って？

小津

ここだよここ。

ハジメ

ここは日本です。

小津

そういう価値観でものを言っちゃいかんよ。

ハジメ

国の名称を変えるような価値観があるんですか？

小津

歴史を知らん奴だな。それ以上に文学を知らん。今の高校は何を教えているんだ。

ハジメ

ちよっと待ってよ、「高二時代」で見てみるから。

と、カバンから「高二時代」を出してページをめくる。

ハジメ

「九六〇を覚悟で宋を建て一二七九うちに宋滅ぶ」

小津

何だ？ それ。

と、見て。

小津

「一五二六なムガル帝国強い国」「三三三四っかりアレクさん」なるほど。

未知男

あつ、それ覚えてないや。

ハジメ

バカ、月曜世界史のテストだぞ。コロンブスの新大陸発見の年は？

未知男

「イヨッ！ クニが見えたぞコロンブス」。

ハジメ

違うよ。「二四九二見つけたコロンブス」だろ？

未知男

違うよ、なに言ってるんだ、いよつくにが見えたぞコロンブス。

小津

ケンカするなよ、一四九二年なんだろ？ どっちも当たってるんだから、いいじゃないか。

未知男

良くないよ。石国見つけたコロンブスなんて、こじつけっぽくて覚えにくいよ。イヨ

ハジメ

ッ、クニが見えたぞの方が、未開大陸を見つけた時の感極まったコロンブスの心情が

未知男

だね、古いんだよ未知男のは。

未知男

なにを！

小津

バスコダガマがインド航路を完成したのは？

ハジメ

一四九八立派なインド行き。

未知男

違うよ。インドへ行ったら一四と九八だよ。

ハジメ

歟なんて現代の高校生は知らねえんだよ。時代が違うんだ時代が。

未知男

僕だって高二時代だい！アレ？僕の「高二時代」これだぞ。

と、押し入れから分厚い小型の本を出す。

小津

やや、大きさが違うな。

未知男・ハジメ

こ、これは一体！

と、一同オーバーだ。

小津

ナゾだ！ 良し。小津研究団の捜査網を網羅して、このナゾを究明しよう。ううん、

電話で問い合わせしてみよう。

と、電話をかけ始める。

未知男、ハジメの「高二時代」を開いて、いきなり投げ捨てる。

ハジメ

なんだよ。

未知男

いきなり「セックス」という文字が……。

と、拾って読み出す。

未知男

中野吉宏の青春講座。今月のテーマ「セツ……」『四月号の「青春講座」に「男女間に友情は成り立つ」と書いてありましたが、セックス関係になった後で別れた男女間にも友情は成り立つと思いますか？（北海道伊達市・Y男）』こんな「高二時代」があるもんか、丸山寛之の小説だって載ってないじゃないか。

小津

もしもし、旺文社ですか？ 「高二時代」編集部お願いします。あ、後藤ちゃん？ 俺、小津よ小津。ター坊だよん。へへへごぶさた。あのさあ……。

ハジメ

で、成り立つの？ ね、成り立つ訳？

未知男

え？

ハジメ

セックス関係になった後で別れた男女間に友情。先生、先生。

綾子

……ど、どうなんでしようか……。

ハジメ

あ、そうか……（と気の毒そう）

綾子、ひったくって読む。

小津

ええ？ ほんとに？ なあんだそうなの。

綾子

答、『セックス関係になった二人には友情は成り立たない。（チラと未知男を見る）また、「セックス関係になったら、頂上に登りつめるか、これは結婚のこと——、奈落の底に落ちるか——別離——のどちらかだ」というくらいの覚悟があつてのセックスで

小津

あるべきだと思えます。(うなずいて) そういう関係になった後で、「結婚相手としては不向きだから、友達として再出発……」なんていうような中途半端な恋愛だったら、セックスまでいく必要がないと思う。(うなずく) セックスの時、人間は、(咳払い)人間は、下半身をさらけ出し、体液で絡み合い、動物的な表情をし』
ハハハそう。

電話中の小津。

辺りでは犬三匹に追いかけられる幸男。

綾子
小津

『動物的な奇声を発する。』
ヒヒヒヒヒ、そう。

電話中の小津。

犬に追われる幸男。

綾子

『客観的に考えてみると、非常に醜い。自分のそのような最も動物的な姿を「友達」に見せることができるだろうか?』

綾子、そうとう入れ込み出す。

綾子

『ボクは「友達」に体を許す女の子の精神を信じない——七月号にも書いたが、「みんな

なライトになった』と言われる今日でさえも、女子高生の十人に六人が、初体験の人の結婚を望んでいる。』

未知男を見て決意の表情。

ハジメ

四人はいいわけだな四人は。未知男、二人ずつ分けような。待てよ、クラスに女子は二〇人だから、八人はできちゃうわけよね……。

小津

はい、どうもどうも、うん、そのうちな。え？ ああ、ツル子だろ？ 昼は娼婦で夜が淑女で、はずれたつて女。え？ あれ「学研」の回しものだったの。「高二コース」の？ なんだよ知らずに三年もつき合ってたわけ？ だから早く別れろつて言ったろ？ 奥さん、どうしたよ。電話した？ ライバル会社にかい？ ……そらいいや。掃除婦になりすまして女便所でみはってた？ 大丈夫だった？ えっ？ ツルの恩返し……ハハハ良かったじゃないの、じゃあまた、うん、うん。

と、電話を切り、まじめ臭つて振り向く。

小津

いやね、「高二時代」編集長、後藤良吉氏の弁によるとこうなんだよ。厚いばかりで活字も小さく読みづらいつた理由から昭和五十五年にA5判からB5判へとスタイルを変え、さらに五十八年にまた一まわり大きくしたのを、今年の一月にこのB5判に戻したということなんだ。移り行く時代の中であがきのたうつ出版業界よ。「高二時代」の未来はいかに。どうだ、小津研究団の捜査網は。

未知男 そんな未来のことがどうして判るんです？

ハジメ え？

未知男 今年は五十一年でしょう。

ハジメ 未知男！

未知男 君は誰だ！

ハジメ 誰ってお前、またもとに戻っちゃったのか？ この三カ月のことを忘れちゃったのか

よ。小津さんていいましたね、未知男に何をしたんです？ どうしちやっただんです？

未知男は？

小津 みっちゃん、小津研究団に復帰したただけだよ。別になあんもしとらんよ。

綾子 岡本君、あんた誰と話してるの？

ハジメ この人ですよ。

綾子 どの人？

ハジメ 先生にはこの人が見えないんですか？

綾子 誰かいるの？ そこに。

ハジメ いない人とは会話はできないよ。

綾子 でもいないわ。

小津 君ね、君、ええと、

ハジメ ハジメです。

小津 ああ、ハジメ君、私は今魔法を使って透明人間になっているのだからね。私が見える

という君の方が、ほんとはおかしんだということを言っておくのを忘れたよ私は。

ハジメ でも見えるもの。

未知男

僕にも見えるけど。

小津

君は小津研究団員だからな。……というのは嘘で、死んだ人間とお話できるのはイタコのイタローだけなんだなこれが。

ハジメ・未知男

……

小津

君も、君も、私のイタコなんだぞきつと。

二人

……

小津

いやいや。私は死んだろ？ ね、君らが霊媒師でもなく、超能力者でもないとしたら、これは歩み寄る魂のせいだ。私と君らとは波長が合うらしい。

二人

なんだかさっぱり判りません。

綾子

どうしたの？ 二人とも。

と、アタフタ。

小津

ごらん？ 劣等の民がアタフタする様を。

と、そこに、さつきから犬達に追い回されて騒いでいた幸男が、追い詰められて卓袱台の上にあがる。

幸男

助けてくれ、こいつら人が、いや犬が変わっている。

小津

ここにも又ひとり劣等民族が。

玉江はいまだ、ところてんのつもりケーキをハシで食べている。靖子はいびきをかいて眠っている。幸男は赤ん坊を背負ったまま、長女の信子を抱きあげ、卓袱台の上でふるえている。

小津

もうよせエミイル、いけどりにしてカカシの居場所を吐かせるんだ。

エミイル

へい、お頭。

クリステイーヌ

カカシはどこだ。

幸男

ウウウウ。

未知男

小津さん、この人は？

小津

人ではない、ライオンだ。

未知男

ライオンですか？　これが？

小津

カカシのかつての旅仲間だったおくびょうライオンがこれだ。

未知男

ああ、あの！

ハジメ

これは児童劇なんですか？

フランソワ

うるさい。動物の精神構造を見下す輩に、児童劇の真髄が判ってたまるか！

ハジメ

あつ、貴様は！

フランソワ

長年の宿敵とこんなところでバッタリハチアワセとは人生っておもしろい。

ハジメ

この鼻のさきつちよのひきつりがあるかぎり貴様の顔は忘れんぞ。

フランソワ

オイラだっててめえに食いちぎられたこの片耳の傷あとを押えて、幾度復讐を誓ったか。

ハジメ

今度こそ生きて帰れると思うなよ。

フランソワ

それはこっちの言う台詞。

小津

おい、こんな時に仲間割れはよせ。

ハジメ

へん！ お前らの仲間になった覚えはないぜ。

小津

だって犬と口きいてるじゃないか。ホラ、若秩父のバツチだ！

ハジメ

いらぬやい！ 俺は一生涯どんな団体にも属さないって決めてるんだ。

フランソワ

お前の父ちゃん創価学会じゃないか。じいちゃんは創政会の議員で、母ちゃんは生長の家、姉ちゃんは赤旗新聞の記者なんだってな。選挙の時には別居するんだって？

ハジメ

くそう！ 団体に所属しながら団体行動のできない家族の悲哀が貴様らに判つてたまるか。

小津

みんな、これらはほつといて、カカシの居場所だ。

エミイル・クリステイヌ

はい。団長。

エミイル

カカシはどこだ。

幸男

ウウウウウ。

エミイル

団長、言葉が通じません。

小津

そうか、こいつにはマンチキン語が通じんらしい。通訳を探せ。

信子

痛っ！

幸男と手をつないでいた信子、なにかとぶつかって初めて声をあげる。

小津

イタツ？ イタじゃないか、こんなところに、君通訳だろ？

信子

三つ。(と指を二本立てる)

小津 三か国語が話せるんだな。

信子 三つ。

小津 あと三つも話せるのか。カカシはどこにいる。

信子 ノンちゃん、三つ。

小津 んんむ、判らん。カカシの奴、魔法で通訳の口を封じたな。どこまでも卑劣な奴め。

三匹 そうだ！ フランソワ、エミール、クリステイヌ。

三匹 はい！ 団長！

ハジメと牽制し合っていたフランソワも悲しい犬の習性で集合してしまう。

小津、小声で何かささやく。

と、三匹、驚くべき演技術で、みごとにカラスに変身する。

カア、カア、カア。

と、ケーキを食べていた玉江。

突如、カカシの格好で構え出す。

おお！

しまった！

カカシの持つて生まれた本能を利用した、小津研究団の科学技術だ。おそれ入ったか！ それにしても。

貴様がカカシであったとは！

バレてしまっっちゃ仕方がない！

一同 玉江

一同 玉江 小津

と、邪悪な顔になる。

小津 カカシめい、風子の心臓をどこへやった！

玉江 ハハハ、ここさ、ここでドクドク動いとるわい！

小津 くそう……ものども、カカシの心臓をえぐり出すんだ。

一同 はい、団長。

と、玉江、綾子の腕を取り盾にする。

一同 あっ！

玉江 この女の生命がおしくないのか。

ハジメ 先生！

綾子 助けてえ！ 助けてえ！

一同 ううむ。

玉江 おくびようライオンをこちらによこせ。

三匹 団長。

小津 離してやれ。

三匹、洪々幸男のナワをとく。

幸男 ありがとうお婆あちゃん。

玉江 礼を言うのはまだ早い。敵は多勢だ。ブリキのきこりはどうした。あいつがいれば百人力なんだが。

幸男 心を探して東京へと。そろそろ戻る頃なんだけど。

綾子 助けて、未知男さん、助けて。

ハジメ 未知男、お前の恋人だろ？ 助けられないの？

未知男 え？ え？ 未だ知らざることが多すぎてとてもついて行けません。

音楽響くが、双方ともどうすることもできず牽制し合っている。

と、そこへ、

六郎 ただいま、いやあ疲れた疲れた。靖子、風呂。なんだ先生、寝ちやつてるの？ しよ
うがないなあ。

と、上着をかけてやったりして、ふと、周りに気づく。

六郎 ん？ ん？

幸男 父さん、こっちこっち。

六郎 ん？

幸男 そっちは敵、こっちだって。

玉江 ブリキのきこりよ、そのオノで切り殺してしまえ。

六郎

オノ？

と、いつの間にか持っていたオノに気づく。

六郎

おお。(オノ？)

玉江

心が欲しくないのかい？ そやつを切り殺せば、お前が欲してやまない永遠の心が入るはず。

六郎

小津さん、小津さんですね。

小津

六ちゃん、元気？

六郎

会いたかった……とつても、とつても会いたかった。

玉江

かかれい！

音楽。

六郎と小津、オノと金のステッキで戦い始める。

二人、戦いながら、

六郎

小津さん、今度はどこに行くんです？ 今度こそ私も連れてってくれるんでしょう？

小津

私と旅立ってるのは小津研究団の団員だけなんだよ。

六郎

私だって入りたかった。昔、押し入力で未知男とヒソヒソやってたでしょ。私だってほんとは仲間に入りたかったんだ。あの、ホラ、若秩父のバッヂ、あれだつてつけてみたかった。

小津 覚えてたのかい？

六郎 ああ、忘れないさ。ホラ、昔、ひとつくすねたのが、ここにある。

と、胸のポケットから取り出す。

小津 六ちゃんは私を嫌ってるのかと思った。

六郎 嫌ってたのは小津さんの方でしょう。私はいつだって、小津さんに好かれようとして
尽くせば尽くすほど嫌われるんだ……。

小津 六ちゃんは私をケイベツしてたんじゃないのかい？

六郎 ……。

小津 六ちゃん。

六郎 私には兄弟がいないから……小津さんのこと、お兄ちゃんみたいに、お兄ちゃんみた
いに尊敬してたんだ……。

小津 生きてるうちに聞きたかったな……そうしたらもつと……。

六郎 小津さん、やっぱり死んじゃったのかい？

玉江 くそ、加勢したいが、この女が邪魔で手出しができません。

綾子 助けて、助けて。

玉江 よし、あの二つの夢の鳥カゴの中に監禁するんだ。そうすれば夢の滅ぶまでは出られ
まい。

綾子 二つの夢の鳥カゴ？

玉江 二つの夢が眠る果てしないベッドの地平線が、球状のオリを描いているのが見えない

のかい？

双子の眠るベッドが明るくなる。

綾子

あそこは……。

玉江と幸男、綾子をベッドに放り投げる。

ハジメ

先生！

綾子

未知男さん、忘れないで、私がいたということ。十年の時を止めて待つてるわ。どうかどうか眠りから覚めても、私を忘れないで。

未知男

あの……。

綾子

「高二時代」を読んだのがいけなかった。私の愛読書は「高二コース」だったのに。残念ですが、「高二コース」は今年の四月になくなりました。

綾子

私の青春が消えて行く。

と、ベッドとともに川下に流れて消える。

小津

行くぞ！

音楽高鳴り、一同身軽に動き始める。戦いひとしきり。

小津と玉江の一騎打ちになる。

玉江

この心臓は誰のもの？ 風子に移植しようとしたのは一体。

小津

ここから返せ、風子が死んでしまう。

玉江

風子は死んじやないわ、風子は決して死にません。

小津

ええ？

玉江、風子に変わっている。

小津

風子……。

風子

フフフフフ。

と、逃げ去る。

小津

風子！

と、追う。

未知男

あ、風子さん、もう十一時なんですか……。

と、一同、追って去る。靖子、残る。

靖子

んんん、あらやだ、寝ちゃった。ん？ 十一時？ 変ね、夜の十一時よね、丸一日寝ちゃったのかしら、誰もいないわ。やだ、どうしちゃったの……。この感じ。子供の頃、風邪で熱出して、自分の骨が無数のとがった角を生んで、それが内側から表面に突き出してくるような、嫌な痛みを感じながら、回転の早いあざやかな夢を見た。早回しのフィルムみたいな途切れたカタカタ動く色達。目の裏が乾いて、頭がキーンと肩胛骨のあたりまで下っていく。体が布団にシミの形にひっついて、誰かに名前を呼ばなければ、そのまま空気中の粒子といっしょくたになって、シミの形の自分の体が徐々に下へと、遠くの底に小さくなって行く。けれど誰かが私の名を呼ぶ。小さく低く、優しく、胸の血が騒いで、深い安堵が、日曜日の朝のような気配をひきつけて……。誰かが私の名を呼ぶ。私は目覚める。こんなふうに手を広げて……。気がつくと、辺りは夕方。ほおずきの色の光がカーテンを射し、だあれもない部屋。生ぬるくなった水枕、洗面器のはしにかかったカラカラの手ぬぐい。だあれもない。いやだわ、だあれもない。

風子、日傘をさしてゆっくり現われる。

靖子

姉さん……。姉さんなんですわね、さつき私の名を呼んだのは。

風子、日傘から顔をのぞかせる。

靖子 姉さんは昔のままね。なんだか私だけが姉さんの分まで年をとって行く。

風子 心臓……。

靖子 え？

風子 新しい心臓を手に入れたの。

靖子 小津さんがあんなに欲しがってた心臓、見つかったのね、良かったわ。ほんとに良かった。

風子 ……。

靖子 姉さん、あの……。

風子 いいかげんにおし、靖子。

靖子 え？

あんながそんなだから、あたしはいつまでたつたつて死ねないじゃないか。小津さんの思いが、この姿形にある限り、あたしやこの心臓を抱えて永遠に、幻影としての風子を演じ続けることになるんじゃないか。セックスのない恋愛がひじょうに疲れるように、実体のないあこがれのためのあこがれに生きる肉体がどんなに苦しいものか、お前には判らないんだろうね。

と、靖子をしめる。

靖子 母さん……。

やっと言ったね、母さんと。あたしのハタチの記念写真をこっそりアルバムからはずして、小津さんの茨城の下宿に送りつけたのは、あれじゃなくてあんななんだろう？

靖子

風子

靖子

風子

靖子

あれ？

死んだ姉さんじゃなくて、あんたなんだろう、風子！

あたしは靖子です。

いくら双子だってあたしには判る。あたしが生んだ双子だもの。靖子も風子も心臓が弱かった。特に靖子は中学の時にはもうダメだった。あんたが首をしめたんだろ？ 靖子が苦しがつて、お前に頼んだんだろ？ 白状おし風子。

母さん許して……あたしと靖子は二人で一人だった。靖子は昔の母さんとそっくりでとつてもきれいな女の子だった。双子でもちつとも似てなくて、あたし、靖子が好きだった。日のたつごとだんだんやせてなえて行く靖子と、日に日に太つて健康になつて行く私との二人の行く末を、初めに靖子が気がついてあたしに言ったの。「姉さん、きつとあたし、もうダメだと思ふのよ。あたしがこんな風に幽霊みたいに、姉さんにピッタリくつついてると、きつと姉さんまでおかしくなつて行くに違いない。姉さんは、生きられるんだもの。お願いだから、あたしを殺して、まだ若く美しいうちに、あたしをそつと殺してちょうだい」「何てこというの靖子、あなたがいなくちゃ、あたしだって生きて行けない」。私は、妹に、靖子に確かに恋していたんです。まるで自分自身を抱きしめるように、自分の中のちっちゃな宝石をめめるように、とつても気持ちよくあの子を愛してた。靖子が死ねば、私も死ぬ。靖子が消えれば、自分の内側の誰も知らないきれいな泉までもが涸れるのだとそう思っていたのです。オイオイ泣いている私を見て、靖子がまた言いました。「私、小津さんが好きなの。東京の大学に通つてるつて言つてたわ。この前病院の待合室で隣り合わせになった人よ、覚えてる？ 姉さん、あの人に手紙を書いてちょうだい。あたし死ぬ前に、恋がしたいの。

あたしの写真を送ってちょうだい。夏になったら、夏が来たら、あの川のほとりで会いましょう。十一時に、夜の十一時に、あの川のほとりで会いましょう」。あたしは手紙を書きました。突きあげるシットの思いを抑えながら、靖子の代わりに書きました。けれど写真を入れる段になって、病気のあたし達には写真なんか一枚もないってことに気づいたの。これから撮るには、あまりに靖子は醜くなっていた。ミイラのようにやせ細った靖子の顔を写真に撮るのはしのびなかった。けれどそれを知らない靖子の方は、ただ無邪気に笑うのです。それで私は、タンスの引き出しから、母さんのあの写真をはぎとって、手紙の中に入れました。きつと靖子がハタチまで生きたら、こんな風になるに違いないと泣いて思ったあの一枚を。

その手紙の差し出し人の名を、どうして風子と書いたんだ。

靖子がそう言ったんです。「あたしが死んでも、死んだと言わずに、ずっと手紙を出して欲しいから」と。そしてあたしも……靖子を死なせたくなかったから……。

それで入れ替わったのかい？

そればかりではありません。小津さんに恋をしていたのはあたしも同じだった……。あの頃の私達は同じものを見、同じものを聞き、いつも同じことを考えていた。靖子と思えば私も思い、私が思えば靖子も思う。そんな時に私も小津さんに恋をしていたのです。けれどそれ以上に私は靖子を愛していた。この奇妙な三角関係を保つために、靖子と私の二人が生き続けるために考えたのが、こんな風なことだったんです。ハタチまでは、あの写真の年までは……と。そして最後のハタチの手紙で、ようやく風子は死んだのです。

風子は死にはしなかったら？ お前が生きている限りア、い、は死なないんだもの。この

風子
靖子

風子
靖子

風子

靖子

風子
靖子

あたしを利用して、お前は小津さんを手に入れたじゃないか。生まれた双子はまたお前達の夢の続きをまさぐっている。……風子、私を殺しておくれ、心臓だけがやけに弾んで、もうついていけないんだ。

その心臓を取り出せるのは本物の風子だけ。小津さんが風子を探しあてなければ、決してできないことでしょう。そしてそれは決してできない。

風子はお前なのに。

靖子が言ったことは、幼い少女の夢だったんです。それに気づいたのは、靖子が死んだあどだった。真に受けたあたしが、必死に靖子になりすまし、最初の手紙を出したあどだった。「十一時に会いましょう」。この裏にある靖子の思いが判ったのが遅すぎたのです。私達は一日中ベッドにいて、夜の十一時には必ず眠ることを強いられていました。十一時からが本当の自分達の世界でした。そう夢を見るのです。十一時から他の健康な少女達と変わりない、自由な翼を広げるのです。特に靖子は、毎日憑かれたように十一時を待っていました。靖子の言った「十一時に会いましょう」は、「夢で会いましょう」と言うことだったので。病気の靖子は、夢でさえ恋ができればそれでいいと、小さな胸であきらめていて、そのことを、私と遊んでいたただけなのでした。……小津さんはだから永遠に靖子と出会うことはないのです。小津さんの風子は、この地上にはない別の十一時を彷徨っているのです……。

靖子。

やっぱり、さつき私を呼んだのは姉さんだったのね。

ええ、あんまりうなされていたから。

うん、なんだか嫌な夢を見ていて、このまま覚めなければどうしようと、とっても恐

かった。

風子 大丈夫よ、あたしが側にいるから。

靖子 うん、もう一度呼んで、私の名を呼んで。

風子 靖子。

靖子 そう、そんな風に。

風子 靖子。

と、ゆっくり消えて行く。

靖子、静かに横になる。

六郎 靖子、靖子。

靖子 んんん。

六郎 風邪ひくぞ。人がくたびれて帰って来てみれば、これだもんな。風呂なんか沸いてないよね、腹もへっちゃったよ。

靖子 ああ、あんた、お帰り、お茶漬けでもつくる？

六郎 うん、……夜通し犬が鳴いてるな。未知男は？

靖子 あれ、まだ戻ってないの？ 子供は寝る時間なのに。

六郎 お客さん達は？

靖子 帰ったんじゃないの？ どれ。

と、押し入れを開けると、

玉江と幸男が、子供と一緒に布団の中で丸くなって眠っている。

靖子

なんだよこんなところで眠ってるよ。ホレ、ホレ、邪魔、邪魔。(と布団を敷き出す)

六郎

(お茶漬けを食べながら) なんだか今夜はやけにくたびれたなあ。運転してただけなのに、フシブシが痛むよ。

幸男

うまそうだな、俺も食べちゃうかな。

玉江

あたしも、

靖子、布団を敷き終え、幸男達につくってやる。靖子もついでに食べ出す。

食べ出した一同を横目で見て、六郎しみじみ、

六郎

さっきあんなに食べたのに、又腹が減るなんて、人間てのはつくづくあさましいもんだなあ。

一同、無言でザラザラ食っている。

六郎

なんかこう、生きてるってこと自体が悲しいんだなあ……。

川の上に浮かぶベツト。

その上の三人、綾子に咲子と散子。

綾子 散子 綾子 咲子 綾子 散子 綾子 咲子 綾子 散子 咲子 綾子 散子 綾子 咲子 綾子 散子 綾子 咲子 綾子 散子

オズ？　　そういえばさつきそんなこと言ってたわね。カカシがどうか。あなたやっぱりドロシーちゃんなのよ。

あたしはハイミスの英語の教師だけど。あなた達はここで何してるの？　夢を見てるの。

え？

夢を見るのがあたくし達の仕事なのよ。

何の夢？

母さんの夢。

パパの好きだったママの夢よ。

ハタチで死んだ夏の花のような母さん。

あたし達の心臓が悪いのは母さんの遺伝のせいなの。だからパパが不死の心臓を探しに出かけたのよ。

じゃあ、これはあなた達の夢なの？

そうよ。

あたしはどうしてあなた達の夢の中にいるのかしら。

きつと恋しているからだわ。

そう、それも終りのない恋。そんな思いが私達の夢に共鳴して、こんな風に揺れるんだわ。

いつ、覚めるのかしら。

夜が明ければ、きつとね、でも……。

でも？

散子

ホラ、時計は十一時をさしたまま少しも先に進まないのよ。きっと誰かが時を止めたんだわ。

綾子

誰が？

咲子

判らないわ、でもきつといつか果てが訪れる。

散子

永遠ということほど恐ろしいことはないもの。

咲子

あたし達だって出かけなくちゃならないのよ。

散子

目が覚めたら、すぐにでも。

綾子

どこへ？

咲子

寒い寒い北の国。

綾子

何しに？

散子

死に行くの私達。

綾子

ええ？

咲子

散ちやんたら、湖の底で王子様を待つよ。

散子

やだ、咲ちゃんが言ったんでしょ。

綾子

王子様のセツプンを待つ眠れる森の……。

咲子

やだ、知ってるの？ あなた。

散子

さすがカゴの鳥ね。

綾子

あたしも行くかな。

咲子

だって、死に行くのよあたし達。

綾子

未知男さんが来てくれるなら死んだっていいんだもの。

散子

あの未知男ちゃんがあなたの王子様なの？

咲子

対象があるだけいいわよ、未知男ちゃんだって。あたし達のは漠然としてるんだから。浮かんてくるのは、

散子

パパの顔だけ。

咲子

あたし達もママのようにパパを待ちましようよ。

散子

死んだパパを。

咲子

湖の底に横たわる三人の美しい処女を見たら、パパはなんて言うかしら。

綾子

三人ってなんで知ってるのよ。

咲子

そんな気がしただけ。

散子

明日行きましよう。

咲子

ええ、ちよつと眠ってから。

散子

ええ、ちよつと。

未知男、走って現われ、辺りをキョロキョロ。反対側よりハジメ、現わる。

未知男

やあ！ 未来の少年。

ハジメ

よう！ 過去に生きる人。

未知男

小津さんを見失った。

ハジメ

きつと大丈夫さ、犬がついてる。

未知男

どうして風子さんがオズの国にいたんだろう。

ハジメ

風子さん？

未知男

小津さんが追っかけてったろ？

ハジメ

あれはカカシだろ？

未知男

錯覚かな、カカシが風子さんに見えるなんて？

ハジメ

風子さん風子さんて、綾子先生どうするの？

未知男

え？

ハジメ

さつきはどうしたんだ、初めて会ったような顔して。

未知男

オズの国に着いた途端に、ほんとの十七に戻った気がして。

ハジメ

オズの国？

未知男

ああ、未だ知らざるオズの国さ。

ハジメ

オズの国はあちらだろ？ 見ろよ。ネオンが瞬いてる。

未知男

それじゃここは？

ハジメ

川園町一丁目。忘れられた街さ。俺らが夢見てたあのオズの国東京は、けっしてここ

を振り返ったりはしない。あのビルの黒い影の上に浮かぶ白いまあるい月。今その月の前を薄い雲の一群が横切って消えた。大いなる自然と大いなる不自然との間を通過しては消えるつかのまの、中途の現象が、この街の記憶さ。

未知男

君はほんとに未来の少年だな。僕がなくした十年の年月の間に、君は育って知ったんだ。僕の知らない、時代の影を。

ハジメ

いいや、何も知りやしないさ、ただただ明るく軽薄に時代の中に居ただけさ。知ることを拒否して生きなくちゃ、生きられない時代だってあるんだもの。君の十七より、もっと幼く、そしてもっと大人なだけさ。

未知男

僕の十七はどこにあるんだろう。ここがオズの国ではないのなら、僕の十七はどこで探す？

ハジメ

君は十七歳。この十七の俺の中に君の十七がひそんでる。だから君は、いつも俺と一緒にだ。俺と一緒に、十七から年をとればいい。十年なんか捨てちゃえよ。

未知男

捨てられる十年があるだろうか。

ハジメ

小出しに捨てていけばちよるいもんさ。

未知男

捨てた十年に追いかけられたらどうしよう。

ハジメ

俺が逆にけとばしてやる。

未知男

復讐されたりしないかい？

ハジメ

平気、平気、俺は明るくて、くつたくのない性格なんだ。

未知男

僕と、いつまでもいてくれるのかい？

ハジメ

ああ、未知男が泣かないように見はってやるさ。カンパネルラみたいに君をかばってやる。

未知男

カンパネルラみたいに？　じゃあ僕はジヨバンニかい？

と、動いた拍子に未知男のポケットからブローチが落ちる。

ハジメ

それは……何か落ちたぞ。

未知男

ああ、忘れてた。木原先生の翡翠のブローチ。今朝、青いネツカチーフが風に飛んで、ブローチが川に落ちたんだ。小津さんが拾ってくれた。早く返さなくちゃ。

ハジメ

先生は丸い地平線のオリの中。どうやってそれを返す？

未知男

そこはどこにあるんだろう。

ハジメ

君が思えば現われる。そんな不確かなものなんだ。

未知男

今思ったのに。

ハジメ

ただ思ってもダメさ、せつなく焦れないと。

未知男

弱ったな。それはできない。

ハジメ

じゃあ、そんなもの捨ててしまえよ。

未知男

そんな気の毒な。

ハジメ

同情で恋ができるのか？

未知男

ううん……。

ハジメ

捨てちゃえって、もとの川ん中に。

未知男

あれっ、君の目、緑色だ。やっぱりここはオズの国なのかな。

ハジメ

その翡翠のブローチが映ってるだけさ。早く捨てろって。

未知男

でもね。

ハジメ

綾子先生と結婚するか、さもなければそれを捨てるかのどっちかだぞ。

未知男

そんな……よし、捨てちゃう。

と、川に投げ入れる。軽いしづきが上る。

ハジメ、片目に手をあてて苦痛の表情。

未知男

あっ！ 君の目。

ハジメ

なんでもないさ、こんなこと……

ハジメの片目から緑色の血が流れる。

未知男

君、片目がないじゃないか、どうしてこんな……。

ハジメ

君が翡翠のブローチだと思ってたのは、実は俺のこれだったというだけのこと。

未知男

どうして言わなかったんだ、それなら捨てたりしないのに。

ハジメ

友情のためには仕方がない。泣くなよ。痛いのは俺だぞ。

未知男

だから泣けるんだ……どうしよう、どうすればいい。なめてもダメかな。

ハジメ

よせよ雑菌が入る。

未知男

目には目をつけていうから、この目をあててみようか。

ハジメ

いいからじっとしていてくれ。

未知男

だってこんなに血が……。

川の中から小津さん、現わる。

青い服を着た子供の死体を抱えている。

未知男

小津さん！

小津

ホラね、やっぱり子供だったろう。

ハジメ

……。

未知男

早く人工呼吸を……。

小津

もうとつくに手遅れだ。ずいぶん川下の方の底に沈んだ。可哀そうに、水につかり

未知男

すぎて体がブヨブヨだ。目ん玉だって溶けて流れちゃって、片目が見つからん。

未知男

片目が？

と、ハジメを見る。

小津

おや、未来の少年じゃないか、うちの犬をあんまりいじめんでくれよ。

ハジメ、ニヤリと寂しく笑う。

ハジメ

未知男、悪いけど、約束を守れそうにないよ。

未知男

え？

ハジメ

俺の十七はもう終りだ。

未知男

ハジメ！

ハジメ

ハジメがあり、オワリがある。さようならジョバンニ。

と、微笑みながら、物のように川に落ちていく。

未知男

ハジメ！ ハジメ！

と、飛び込もうとする。

小津

よせ、もう手遅れだって言っただろ？

未知男

え？

小津

その死んだ子供を良く見るんだ。

未知男

(吐き気をもよおしながら見つめる) あ、ハツ君、ま、まさか……これは一体、小津さん、一体どうなってるんだ。

小津

十二年前のあの時、川に落ちたハツ君を探して、君と私は一時間近く川の中に浸かってた。だけど、とうとう見つからなかった。みっちゃんも、何でも忘れるんだな。

未知男

だけど、ハジメは、ずっと一緒にいるってさつき……カンパネラだってさつき。だからいつちやっただ。ひとり残るのは、ジョバンニなんだから。

未知男

やっぱりこれは夢なんだ。ああ……でもいつになったら覚めるんだ……小津さん、誰が僕を揺り起こしてくれるんでしょう。もしあの頃に戻るのなら、十年いや百年の時を捨ててもいい。

犬達、現わる

フランソワ

団長！ カカシを見失いました。

エミール

若い女に姿を変え、ほうきならぬ舟に乗って、どこか遠い彼方に消えました。

クリステイーヌ

どうしましょう、あれはほんとにカカシだったのかしら。ねえ、もう辺りは緑色が消えて、ただの灰色の街並に戻ってる。小津さん、ここはほんとにエメラルドの都なんですか？

小津

ううん、どうもニセものだったらしいな。しかしホラここに、黄色のレンガ道。私が小津さんである限り、絶対にオズの国は近いはずだ。

エミール

じゃあ、また出かけられるんですね。

小津 ああ。

フランソワ 今度は僕らも一緒にしよう？

小津 当然だ、君らは小津研究団の団員じゃないか。

クリステイーヌ そうよ、あたし達がいなくちゃね。

小津 よしよし。

未知男 でも小津さん、さつき僕はオズの国はこの川のあちら側だって、聞きました。

小津 あの東京が？ それは違うさ。私はあちら側からやってきたんだもの。あのざわめく東京から、驚くべき無秩序の、夜のない街からね。あのビルの一室からこちらを見下ろすと、ここはまるでオズの国だ。私はここに帰るために旅を続けているんだと思うってきたんだよ。私が旅をしていたのは、アフリカでもアラスカでもない、あの東京の未熟なままに、枯れ果てたちっぽけな現実だった。

未知男 小津さん。

小津 けれども、帰るべきオズの国は……。

フランソワ 小津さん、行くんでしよう？

三匹 行くんでしよう、オズの国へ。

小津 ああ……出かけよう。

未知男 小津さん、どこへ行くんです？

小津 嵐の中へ！

と、川が氾濫し、どうと水があふれ、家並みを飲みこんで行く。流れてくるベッド。

咲子 ああ、夏が氾濫する。

散子 あの時と同じ夢。

綾子 未知男さあん、私が夏に消えて、季節が変わっても、一輪のバラの陰に、紅茶に溶ける角砂糖のまろやかなうねりの中に、マーケットの前の街灯に集る昆虫達のリン粉の

きらめきに、コタツの上の灰皿の消し忘れたたばこの紫色の煙の中に、きつと夏を燻らせましょう。そして、そうしているのは私なのだと、きつと思つて下さいね。さようなら、未知男さん、いいえ、こんどはいつも会えるのね。

咲子 あたし達も出かけられる。

散子 そう、ちよつと眠つてから。

咲子 そう、ちよつと。

ベッド、川にのまれ消える。

と、川の頂点に小舟に乗った風子が、心臓を高く掲げて現わる。

小津 風子！

フランソワ あの女だ、あの女が夏をひきつれてやってくる。

風子 さあ、夏の心臓を持って来ました。小津さん、あなたに返しましょう！

と、風子、心臓を、小津に投げつける。

小津 ああ、これは。

しかし、心臓はドロドロに腐って溶けてゆく。

エミール

小津さん、心臓が腐っていく。

フランソワ

不死の心臓はどこにあるんです？

クリステイーヌ

オズの国に、オズの国に早く行かなくちゃ。

小津

風子。

と、やっとの思いで風子の小舟にたどりつく。

川の波の頂に立つ、風子と小津。

笑う風子。

小津、一番の高みに立つと、自分の胸をえぐり、生きた心臓をほじくり出す。

驚く一同。

小津、ドクドクと血のしたたる心臓を掲げ、風子の胸の穴にねじ入れる。

後ろ向きの風子、こちらを見ると、なんと靖子に変わっていた。

未知男

母さん！

笑う靖子。

倒れかかる小津。それを抱き止め、靖子、優しく微笑む。

靖子

ごらん未知男、私の夏を。

音楽高鳴り、すべては沈み、川は砂漠と化して行く。

ひとり残る未知男。砂漠にかすかな風が吹く。

未知男

僕は目を覚ましました。すると、街は消えていたのです。氾濫した川は一晚のうちにすべてを飲み込み、どう泳いだのか、父さんの小舟にしがみついていたというこの僕だけが救助隊員の太い腕の中で目を覚ましました。川園町のすべての住民達が眠りのうちに消えたのに、どうして僕だけが目覚めてしまったのか。十年前のムシ暑い、八月十五日の夜十一時、永遠に覚めることのない夢の中に、あの街の人達は暮らしているのです。そしてこの十年、目覚めてしまった僕はと云えば、どうしても、あの夏を忘れられずに、こうしてここに来てしまうのです。あの日から三カ月たったある日、小津さんがフラリと帰ってきました。街の形のないこの街に。僕の大好きな小津さんは、昔のように外国煙草の匂いをさせて、黙って僕を見ていました。それだけです。どうすることもできないのです。そして今日、十年後の九月〇日、小津さんは季節を夏に変えると、あの街の人達の中に帰って行きました。僕は……目覚めた十年の日々を抱えて、こうしているより他はないのです。でも、これがもし夢であったなら、十年の夢から覚める時があったなら。生きたあの街の生活に戻ることができなのです。眠っていたのは僕の方で、街は今日も、起きて動いているのだと、僕は今でも信じているのです。

カミナリの音がして、ニワカ雨が降る。

未知男、雨の中に立ちつくすと、黒い傘をさしかける少年がいた。ハジメである。

ホラ見ろ、降ったろ？

あ、君。

俺の鼻は当るだろう。濡れるぞ、側に寄れよ。

うん。

雨に濡れたぐらいで泣くんじゃないぞ。

泣いてなんかいないさ。

帰ろうか。

うん、帰ろう。

ハジメ
未知男
ハジメ
未知男
ハジメ
未知男
ハジメ
未知男

と、自転車を引いたり、新聞紙をかぶったりした女生徒達が、「さようなら」「さようなら」と通り過ぎて行く。

そして黒い傘をさした人々が行き過ぎ、未知男とハジメ、その中に消えて行く。

アンダンテ・カンタービレ。

砂漠の果てに、小津さんと犬達の姿がチラと動いたように見えた。